掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成23年3月31日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と
海光るわが故里

第 102 号

かわせみ学園放送講座講義録
岸田劉生と鵠沼……岡田　哲明… 1
同テキスト…… 16
公民館まつり展示
すわん會……竹内　広弥… 37
事業報告
鵠沼の女流作家　内藤千代子…… 46
今井達夫遺稿　活字化と保存…… 49
相模国準四国八十八ヶ所　研究報告と講座…… 52
多摩と湘南　ー私の二都物語ー〔2〕…… 植松　民也… 54
今井達夫遺稿⑦
南天の赤い実……今井　達夫… 61
活動の記録（平成22年10月～23年3月）　総務担当 …… 63
編集後記 …… 66

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」
とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

かわせみ学園放送講座

岸田劉生と鵠沼（1）

講師　岡田 哲明（会員）

第1週（2010/11/23放送）

はじめに

私は鵠沼市民センターのサークルの一つ「鵠沼を語る会」の岡田と申します。今から8年ほど前、鵠沼を語る会は、「華ひらく鵠沼文化展」をルミネ6階にあります藤沢市の展示室で行ったことがあります。その時、私は岸田劉生の住まいの復元模型を製作して展示しました。それがきっかけで劉生のことを調べるようになり、今回、かわせみ学園の講座で岸田劉生について“何か話せ”とのお話が「鵠沼を語る会」に寄せられ、お鉢が私に回って来たというわけであります。

『岸田劉生と鵠沼』という題でこれから何回かにわたってお話を申し上げるわけですが、なにせ私はアマチュアの一美術愛好者にすぎませんから、専門の美術評論家や美術史家、郷土史研究家のお叱りを受けるような飛んだ見当違いを申し上げるやも知れませんが、その節はお許しを願いたいと思います。

お話し申し上げる内容は主として岸田麗子著『父・岸田劉生』と岩波から出ている『岸田劉生全集』その他、に書かれている中から劉生の生い立ちや、人間性を見てみたい。また恋愛、結婚、娘の誕生、発病から鵠沼転地のいきさつ、鵠沼ではどんな家に住んでいたか、どんな人たちと住んでいたか、どんな生活をしていたか、交友関係はどうであったか、といった側面から、当時の鵠沼にはどんなお店があったか、どんな行事があったか、など、大正時代の鵠沼が見えてくる事柄についてもお話しできたらと思います。

ご承知の方も多いと思いますが岸田劉生は大正6年2月23日から大正12年9月15日まで6年半余を鵠沼で過ごしましたが、その後半、大正9年から大正12年9月関東大震災で鵠沼を去るまで、3年9カ月のあいだ一日も欠かさず日記をつけています。9年の日記にはごくわずかしか絵が入っていませんが、翌10年か

らは、毎日絵入りの日記になっています。鵠沼を去ってからも劉生は日記を書きつづけるのですが、ここでは鵠沼以後の劉生日記には触れないことにいたします。

おいたち

まず岸田劉生という画家の生い立ちをお話ししなければなりません。というのは、鵠沼での生活や態度、考え方の基盤が彼の生い立ちというか育ち方が、大きく影響していることが日記からも読み取れるからです。娘の麗子がその著書『父・岸田劉生』に

「岸田劉生は 1891(明治 24)年 6 月 23 日、東京市京橋区銀座 2 丁目 11 番地、楽善堂精錡水本舗に明治の先覚者の一人であった岸田吟香の 9 番目の子供、四男として生まれた。吟香 58 歳、妻の勝子 36 歳のときである。劉生が生まれる時、吟香は上海に行っていて日本にいなかったので家を出る時、勝子に「生まれる子供が男だったら劉生と名付けるように。」といってでかけたという。「劉は卯年に因み卯は金気のうえに坐し刀を傍にして邪気を断ち一般大生を守る。」という意味があるそうで、吟香は卯年に生まれてくる我が子にこの字を選んで下に「生」をつけて名として出かけて行ったのだった。」と書いています。

麗子は父劉生の父、つまりお爺さんである吟香のことを、さりげなく「明治の先覚者の一人」と紹介していますが、なかなかどうして岸田吟香という人は大変な人で、明治初期から末期にかけて、出版、報道、実業、教育など多方面で活躍した人です。どんな業績を残し、どんな人柄であったか、ざっと述べてみましょう。いくつかの人名事典の内容を総合しますと

岸田吟香、ギンは詩吟の吟、香は香りという字であります。彼は、岡山県美作の農業兼酒造業、岸田秀治郎徳義の長男として 1833(天保 4)年に生まれました。銀次または銀次郎を名乗り、号は吟香。ペンネームは吟道人と称しました。

幼なくして機智衆を超え、神童の誉れありといわれておりました。

17 歳のとき江戸に上り徳川家の文学、林図書頭(はやしずしょのかみ)の塾に入門。その後、三河挙母(ころも)藩、内藤侯に仕官しましたが健康を害して故郷に戻ります。1856 (安政 3) 年 23 歳のとき、大阪に出て、翌年 24 歳で江戸に出て参りまして藤森天山 (儒学者、勤皇の志士、) に入門いたします。1858 (安政 5) 年 25 歳のとき、天山が安政の大獄で幕府に追われ江戸を追放されたとき、かかわりを疑われ上州に逃れます。ほとぼりが冷めるころに江戸に戻って参りまして深川の妓楼の箱屋 (箱屋とはお

座敷に出る芸者に従って箱に入れた三味線を持って行く男のこと）をしたり、風呂屋の三助など、いわば下男として糊口をしのいでおりましたが、ほどなく妓楼の主人となり吉原に住むようになります。このころ、気ままに暮らすをもじり「ままよのぎん」と名乗っていましたが、転じて「銀次」となり、仲間うちで「銀公」とよばれるようになった事から「吟香」と称することになったといいます。また一説には、南宋の詩人陸游（りくゆう）の詩の一節「吟到梅花句亦香」（吟して梅花に到れば句もまた香（かんば）し）からとったものであるともいわれています。

1863（文久 3）年 4 月に目を患い箕作秋坪（みつくりしゅうへい）（蘭学者、三叉学舎を興した。三叉学舎は東郷平八郎も学んだ塾で慶応義塾と並び称せられた名門塾）の紹介でヘボンと知己になります。ヘボンとはジェームス・カーティス・ヘプバーン(1815～1911)。ペンシルベニア出身のアメリカ人で、医師、宣教師として江戸時代に来日。ヘボン式ローマ字をつくった人として有名ですね、また明治学院の創設者でもあります。そのヘボンが本邦初の本格的和英辞典である『和英語林集成』を 1866（慶応 2）年に出版しますが、その編纂、出版に当たり、吟香は、その手伝いをします。当時アジアで一番出版技術が優れているといわれた上海の印刷所に行って印刷校正につとめました。上海にはカタカナの活字がなかったので鋳造するための版下も吟香が作りました。

吟香はかねてからジョセフ・ヒコ（本名浜田彦蔵　播磨出身、海上遭難 1852～1859 滞米、通訳、貿易商、新聞王といわれた）に英語を習っていたのです。

また『新聞紙』という日本最初の新聞を 1864（文久 4）年ジョセフ・ヒコ、本間潜蔵とともに創刊しました。5 年後の明治 2 年『横浜新報・もしほ草』を発刊。1872(明治 5)年、『東京日日新聞』の創刊にもかかわりました。1874（明治 7）年、台湾出兵の際には、日本初の従軍記者として自筆の挿絵入りの記事を本国に送り届けました。劉生の絵の素質は父親譲りなのかも知れません。また東京日日新聞に「精錡水」の広告を出し、これは新聞広告の商業的活用の最初と言われています。1877（明治 10）年には東京日日新聞を退社しまして、売薬業に専念します。

『和英語林集成』でヘボンの信頼を得、ヘボンから製造法を教わった点眼薬「精錡水」を 1867(慶応 3)年に製造販売をはじめます。これまた我が国初めての点眼薬販売であります。この年、東京横浜間の定期航路をつくり人流、物流をうなが

す回漕業を始めます。また横浜に骨董玩具店を開き、明治2年には氷室商会という氷製造業を起こしています。

売薬業は順調に推移し、明治 8 年、銀座に移り「楽善堂」の屋号で「精錡水」のほか薬シャボン(今の薬用石鹸のはしりで消毒臭が強かった)、ジュンパイロ(咳止の薬で水飴状の漢方薬) などを売る薬房と中国の筆墨、硯、文房具や書籍を売る店を構えました。

余談ですがこのころの「精錡水」の看板が現存しています。川崎市にある日本民家園のなかに長野県伊那から移築された「三沢家住宅」があります。三沢家は19 世紀中ごろに建てられた薬屋さんで、土間の壁に木製の薬の看板が数枚掛けてあります。そのうちの 1 枚が「精錡水」のもので上部に横書きで「目薬」、右に「官許本家調合所東京銀座岸田吟香製」、左に「大取次売弘所養血圓本舗三沢荘衛」、中央に大きく「精錡水」、その下に 4 行小さい字で「西洋大医ノ発明ニシテ眼病ニ用ヒテ神効無比ノ良剤ナル普ク世上ノ知ル所也」と堅木の板に金文字で彫ってあります。

1880 (明治 13) 年、上海に渡り楽善堂支店を開き販路を広げます。そこに大陸で活躍することを志す人々が集まり、吟香はそれらの人々を支援し、日清貿易研究所や東亜同文書院の設立について中心的役割を担います。また日清の友好、貿易のために興亜会 (亜細亜協会) を組織しました。

目薬からの発想でありましょうか盲人のための学校「楽善会訓盲院 (現 : 筑波大学付属盲学校) をも設立しましたし、中国各地に病院を設けた「同仁会」にも積極的に参加、欧米式の医療を広めるだけではなく、漢方薬にも注目し日本に普及させてもいます。

明治 27 年 61 歳の時、勲六等瑞宝章に叙せられました。

晩年は『清国地誌』の編纂に努めましたが完成を待たずに 72 歳で亡くなりました。『清国地誌』は吟香没後に出版されました。

死後、従六位を追贈されています。

以上が吟香のプロフィールですが、とにかく、本邦初というのが「新聞発行、経営」「新聞広告」「従軍記者」「合資会社設立」「廻船商社設立」「製氷会社設立」「油井掘削会社設立」「点眼薬製造販売」「盲学校設立」とじつに多方面にわたっ

ております。

また容姿性格について「資性洒落、小節に拘らず、その顔渥丹（顔色が赤くつやがあること）のごとく、その髪銀針のごとく、弁は懸河のごとく、気は虹のごとし。隷書をよくす。」と書かれています。

次に吟香の家庭、つまり、劉生の育った環境はどうであったでしょう。

吟香は晩婚でした。31 歳で初婚。横浜の為替商兼絹生糸貿易商であった小林亀蔵の三女、勝子と再婚したのは 1869(明治 2)年、吟香 36 歳、勝子 14 歳のときであります。結婚後 4 年目に初めて長男、銀次郎が生まれ、それ以後、27 年間に 14 人の子供が次々と生まれるのでありますが、　どうしたことか皆若死で、それだけの多勢の兄弟姉妹で 40 の声を聞いたものは数えるほどしかなく、その生年月日なども詳らかでない人もありますが、生まれた順に並べるとだいたい次のようであります。

長男：銀次郎（精神病、）31 歳、
長女：柳子　生没年不詳、
次女：静子 10 歳未満、
三女：駒子 26 歳、
四女：福子 40~41 歳、
二男：艾(かい)生（二代目吟香を継ぐ）35 歳、
三男：松若(まつわか)56 歳（三代目吟香）、
五女：敏子 34 歳、
四男：劉生 38 歳、
五男：辰弥（オペラ歌手、のち宝塚演出家）52 歳、
六男：安良(やすら)34 歳、
七男：勝利(しょうり)47 歳、
六女：照子 82 歳、
七女：菊枝 0 歳

この兄弟姉妹のなかで 3 人の精神異常者がいました。特に長兄は劉生が物心付いたころは座敷牢に幽閉されていたといいます。それは劉生の母勝子の姉が精神異常者であったから、母方の遺伝と思われますが、劉生は終生、「自分は気ち

がいになるのではないか」という恐怖から解放されることはなかったと麗子は書いていますし、些細なことで癇癪を起こし暴力をふるい器物を破損する非常に激しやすい性格は精神異常者に近いものがあります。

もうひとつ、劉生は肉体的異状があったといいます。後年鵠沼に住むようになった1919(大正8)年9月、日赤に入院、手術してそれを切除するのですが、片方が人並より大きかった。それは双生児の可能性を示唆するものであったという。小学生のころから人にもそれが分かったらしく、それを囃し立てられました。摘出したものは今も日赤に保存されていると麗子の記述にあります。

劉生が育ったころの岸田家はもっとも輝かしい時期で、父、吟香は勲六等に叙され日本薬学会常議員でもありました。家業の楽善堂の経営も順調で、経済的にも大いに恵まれた環境で幼少期を過ごしました。その様子について麗子は。

「銀座の家は当時としてはハイカラな家で二階はずっとバルコニーになっていて、銀座通りを何かの催し物の行列がとおるときには、家中のものがここに並んで見物したという。吟香はよくこのバルコニーに出て体操をしたらしい。白髪白髯、赭顔巨躯の吟香が、まだ明治のころの、人通りも少ないときとはいえ、銀座通りに面した洋館のバルコニーで、西洋式の体操をしている図は、随分人目を引いたであろう。

洋館の向かって右が吟香の書斎になっていた。書棚には本がぎっしり詰まっており、バルコニーのほうに大きな書き物机がおいてあった。書棚の前にはソファーなどが置いてあり、真ん中の食堂との境の壁にマントルピースがあり、その横に食堂へのドアがあった。

食堂には大きなシャンデリアが輝き、美しい飾りの付いた大鏡と飾り台があって毎朝、吟香はその前に立ってブラシで髪をとかしていた。

吟香の所に客があると、洋食がスープから全部そろって届き、勝子も一緒に夫婦で客をもてなしたという。

階下は店の薬房の奥が製造場と呼ばれていた工場で、ここで薬の製造がおこなわれていた。製造所の隣が台所で、中庭にそった廊下の突き当たりに勝子の部屋があり、吟香は朝食はいつも勝子の部屋で勝子とともにとった。たいていパンやミルクの洋風な食事だったという。

子供たちにはそれぞれ乳母が付いていた。乳を与える役目が済んでもそのまま“おつき”として残った人もあり、乳母が暇を取った後、お付きとして来た人も

あった。乳母たちはそれぞれ、銀ちゃんばあや、辰っちゃんばあや、と云う風に呼ばれ、家族の一員として暮らしていた。」と書いています。ここでいう銀座の家というのは銀座 2 丁目 10 番地、いまの英国屋から伊東屋にかけてのあたりになります。

吟香は 1905（明治 38）年 6 月 7 日 72 歳で亡くなり、妻、勝子も同年 12 月 9 日に亡くなりました。劉生が 14 歳のときであります。葬儀はキリスト教で数寄屋橋教会の田村牧師によって執り行われました。吟香没後、艾生（次男）が二代目吟香を継ぐのですが、商才なく家業は急速に傾きます。

前段が長くなりましたが、いよいよ画家としての劉生のお話に入ります。

1906 年 3 月、父母を失った翌年、15 歳の劉生は東京師範付属中を中退することになります。このころ、数寄屋橋教会の田村牧師を慕ってキリスト教に帰依し、洗礼を受けました。教会の日曜学校の先生をしながら、独学で絵画を学び始め、水彩画家、大下藤次郎が主宰する美術雑誌「みずえ」に載った大下の絵を模写したりしてもっぱら水彩画を描いていました。17 歳の時、赤坂葵橋で黒田清輝がやっていた白馬会洋画研究所に入り本格的に油彩画を学びます。

研究所では清宮彬（せいみやひとし）と岡本帰一という二人の友人を得ます。のちに清宮は草土社創立の同人に、岡本は童画作家になりました。

「そのころ研究所では大変相撲が流行り、なかなか強い人も 4,5 人はいた。岸田君はなかでも最も熱心な力士の一人でモデルとにらめっくらをするよりよほどこの方に興味を持ったらしく、絵具箱は持って来ても、そんなものは御用なしに皆が帰る時間まで相撲ばかり取っていたことも度々あった位だ。」と桜井知足は雑誌アトリエに「葵橋研究所時代の岸田君」に書いています。後年鵠沼で、庭に土俵をつくって、毎日のように相撲に興じる劉生の相撲好きはこのころに育まれたのでしょう。やがて、ひたむきな画学生であった劉生は雑誌『白樺』にめぐりあい強い衝撃を受けることになります。

第2週（2010/11/30放送）

劉生が雑誌『白樺』を購読するのは1911（明治44）年、20歳のことで、第2巻の第3号ルノアール特集でした。そして同じ年のゴッホ号を見て強い衝撃を受けます。清宮が柳宗悦を知っていたので、清宮、岡本、岸田三人で柳を訪ね、そこで多くのゴッホ、セザンヌ、ゴーガン、マチス等の複製を見ることができたのでありました。

武者小路実篤と初めて会ったのも柳の所でであったと武者小路は自著『岸田劉生』に書いていまして、そのくだりを読んでみますと

「岸田劉生と初めて逢ったのは麻布市兵衛町の柳宗悦（やなぎむねよし）の家だった。柳から電話がかかり、丸善を通して注文した泰西名画の複製が届いたから見に来ないかというので、僕は大急ぎで出かけてみたら柳の室（へや）には三人の来客が既に来ていて四人で複製を見ながら興奮して喋っていた。僕は三人に紹介され、すぐにその仲間に入った。写真はセザンヌ、ゴッホ、ゴウガン、マチスなぞだったかと思う。ことにゴッホの絵はまだ見たことのない絵が多く興奮させられた。僕が柳と一緒に注文したのもその内にあった。三人の来客はみな若く、絵を描いている人々で、岸田と清宮彬と岡本帰一だった。その時僕は28柳は24岸田は22だったと思う。岸田は僕と6つちがいだった。（中略）それから岸田はよくやって来た。一人で来たり、清宮や岡本と一諸に来たり、その他の人4、5人連れてきたこともある。しかし白樺の人とは、ほとんど誰とも仲良くならなかった。僕の所で逢っても別に話もしなかった。無愛想な態度が、傲慢のように思われ、白樺仲間であまり評判は良くなかった。」

とあります。

しかし、白樺購読と白樺同人との付き合いは劉生に大きな影響を与えました。最初に手にした第2巻3月号にはルノアールのこととルノアールの作品が出ていたので興奮して買ったと白樺十周年記念号(第10巻4号、大正8(1919)年4月刊)に自身の思い出を書いていますし、この記念号以前、第9巻7号、大正7(1918)年7月刊「白樺創刊100号」から第14巻5号、大正12年5月刊まで4年10ヶ月延58号に亘って、ずっと表紙のデザインを手掛けます。その図柄は12種類に及びます。同人たちとの付き合いもお互いの気心が分かるにつれて濃密になって行きます。とくに表紙を担当した時期は鵠沼時代ですから、お隣の鎌倉に住む長

与、園池、千家、木下、犬養との付き合いは繁くなります。

劉生が画家として作品を世に発表したのは、研究所に入った翌年 1909（明治42）年の文展に「馬小屋」「若杉」が入選したのが最初ですが、はっきりと自我を主張したのは 1912（明治 45）年 4 月、21 歳の時、神田で高村光太郎が開いていた画廊、琅玕堂での個展でありました。

ただ、この時の劉生作品 20 点はきわめてゴッホの影響を強く受けたものばかりだったので、不評を買いました。これは白樺に掲載されたゴッホの図版と紹介記事に夢中になった劉生としてはきわめて自然なことであったのだろうと思われます。

この年（7 月に明治天皇が亡くなられましたので大正元年）の 10 月にヒュウザン会第 1 回展が銀座の読売新聞社三階でおこなわれます。第 1 回ヒュウザン会展は世間の注目をあつめ、のちに劉生の妻になる女性も評判をきいてこの会場に行き、二人は運命の出会いを果たすことになります。

それではヒュウザン会についてすこし、ご説明をしておきたいと思います。

ヒュウザンというのはフランス語でデッサンに使う木炭のことで斎藤与里は目録の序文で会の名をヒュウザン会と致しましたと書いています。

ヒュウザン会展というのは最初、斎藤与里（1885～1959 洋画家、鹿子木孟郎とともにパリ留学、後期印象派を日本に紹介した）が個展の会場を探していて読売が貸すと聞いていってみたが会場が広すぎてあきらめようとしていたところに、岸田と清宮が読売をたずねて行き会場を区切って自分たちに貸してくれるよう交渉したが区切るのは駄目と断られ、それならいっそ、三人でそれぞれの友人らに声をかけてはどうかということを斎藤が提案して実現したもので斎藤グループ、岸田、清宮グループ、合計 33 人の画家が集まって開かれました。

日本で初めて洋画家たちの意思で行われた在野の展覧会でしたから、大いに世間を賑わせました。読売新聞の文化部長だった人見東明は好意的な記事を書き、経済的には『現代の洋画』誌を出版していた北山清太郎が援助しました。入場料 10 銭、目録 5 銭、でした。

会場では劉生の弟辰弥が蓄音器を持ち込みカルーソーの独唱やアヴェマリアやオペラ、リゴレットやカルメンを流したそうです。ヒュウザン会の同人はイタリアの未来派の人たちとも連絡を取り、イタリアから『自分たちの前衛となれ』とカタログを送ってきたりもしました。会員がアバンギャルドという言葉を知った

のもこのときであったといいます。

ヒュウザン会は『ヒュウザン』という雑誌も発行しました。会のメンバーはヨーロッパから帰国して間もない高村光太郎、斎藤与里ら、および『方寸』『白樺』によってヨーロッパ美術の事情を知らされた岸田らで構成されていました。そうした構成メンバーですから一応ムード的には同志意識はあったものの規約もなければ会としての展望もなかった。とにかくヨーロッパ仕込みの新しい絵を、ということで集まった寄り合い所帯でした。ですから翌大正2年3月の第2回東京展ではヒュウザン会からフュウザン会に改称されます。5月京都巡回展のあと斎藤と岸田の間で衝突が起こり、解散してしまいます。

ヒュウザン会のメンバーであった硲伊之助の回想では第二回展では岸田が自分の取り巻きを沢山引き入れ、質の低下を招いた。岸田という人は、とにかくワンマンで、気に入らぬことがあると誰彼かまわずにカンシャクを起こしケンカを始めるわけです。偏屈な男でしたね。だけど絵はうまかった。それは認めざるを得ません。といっています。麗子も解散のいきさつを「フュウザン会は第二回を終わって間もなく解散になった。木村荘八氏と劉生とで武者小路を訪ね、これから斎藤与里の所へ行って会をやめるように談判するのだといい、武者小路はすこしなだめてみたが理由も分からないので、たってとめもしなかった。武者小路はなにかで劉生が腹を立てたのが原因だろうといっておられる。」と書いています。

フュウザン会についてはその位にして、とにかく第一回展の評判の高さに、当時、鏑木清方について日本画を習っていた20歳の女性が同門の友人と語らってみにでかけたのであります。

その女性の名前は小林蘂(こばやししげる)といいます。父は新潟県新発田の出身、小林良四郎といい、乃木希典院長の学習院の漢学の教師。母は三重県桑名の出身、飯村新といい夫婦には三人娘があり、長女、操(みさお)。次女、薫(かおる)。そして三女が蘂(しげる)であり明治25(1892)年2月1日、神田区西小川町で生まれました。劉生とは一つ違いです。

蘂は劉生の絵を見て、こんな絵を描くのはどんな人だろうとおもい会場の人に訊くと、向こうから来る人がそうだと教えられた。赤い顔にニキビをこしらえたその人は、絵から受けた印象よりずっと若かったが人好きのするような青年ではありませんでした。蘂は正直、がっかりしましたが、その絵にはすっかり魅了されてしまったので、のちに劉生に宛てて手紙を書きます。住所が分からないので北山清太郎の事務所宛てに出したそうです。

そしてそこで初めて正式に二人は会った。そのときの劉生の話題は「ゴッホとゴーギャンの違いについて」であったといいますから、とてもロマンスに発展するとは思えない話題です。

ところが縁は異なもの、当時、劉生は小石川区音羽町 7-4 富山というビスケット屋の二階に下宿していましたが、二人の恋愛はここで成長し翌大正 2(1913)年 7 月 1 日に二人は結婚することになります。

結婚式は小林家でごく内輪で行われました。これにはわけがありまして、劉生は「結婚するまで」という約束で実家から毎月 15 円の仕送りを受けていましたが、それでは足りませんので、新聞に展覧会の批評を書いたり、少年少女雑誌の挿絵を描いたり、ポンチ絵を描いたりして生活費を工面していたのです。一人食うのにやっとというのに結婚すれば生活はより苦しくなるのは目に見えている。

まだ画家としての生活が成り立っていないのに、結婚することで独立したと認められ生活費の援助を打ち切られたのでは、たちまち困窮するのです。それで二人で相談のすえ、岸田家には知らせずに、蘂の実家で式を挙げることにしました。

岸田家側の列席者として、当時、女子学習院在学中で寄宿舎にいる妹の照子だけを呼ぶことにしました。照子は兄の結婚式に出るという理由で外出許可を得て列席しました。ここまでは作戦成功だったのですが、照子に用ができたらしく銀座の実家から寄宿舎に電話があり応対に出た舎監の先生から一切がばれてしまった。翌日、岸田家から小僧さんが使いに来てちょっと来ていただきたいというので何事かと劉生が出かけていくと、昨夜の結婚のことが分かってしまっていたのです。家賃節約のため二人は豊多摩郡大久保町西大久保 457 の小林家の二階に、新家庭を持ったのであります。

麗子は「父も結婚したらもう生家からの援助は受けられないものと一途に思い込みすぎたところはなかったろうか。一応、吟香亡きあと、そういう約束であっても、生活がまだはっきり成り立っていないのに、結婚したら本当に援助を打ち切ってしまったかどうか、はじめから兄に相談するようにしていたら、そんなにバカなことにはならずに済んだような気もする。ただ、どちらも癇癪持ちの気の短い兄弟の間では、大人同士の話し合いのような空気はなかったのかも知れない。」と書いています。

大正 2(1913)年 10 月 16 日、豊多摩郡代々木山谷 117 に新居を構えます。蘂の妊娠が大きな理由だろうと思いますが半年後の翌、大正 3 年 4 月 10 日に麗子が生まれます。

劉生は大変喜び妻の蘂の日記帳にその喜びを次のように記しています。

4月10日、晴れ。払暁、4時半頃（時計破損して手元になし）蘂の陣痛甚だしくなり、余起きて産婆を迎えに行く。5時産婆来る。暁の色美しく、東の空ほの赤く霊妙の気す。太陽の出づるをしきりに見たし。子供も太陽とともに生まれんかなぞ思いまた願う。6時ころ外に出て太陽を見る。輝きわたり静かに力強く上り来る。蘂の陣痛だんだん強くなる。手を与えて握らしむ。潮の如く、満面紅をさし総身に力を込めていきむ。「苦しかろう」と思う。「痛かろう」と思う。かくの如き肉体にせし、余の肉欲を思い罪の如く感ず。恥たき心地す。また、蘂しきりに愛らしく、失うに堪えざる心地す。「よしよし」「さあ、しっかりしろよ」なぞ、手を握り締め悶うるたびにいい与う。

1914年4月10日、午後1時10分強過ぎ（時計はさっき時計屋から持ってきた)、遂に女児生まる。オギャという声を聞くとともに、ほっとした。嬉しかった。ただ嬉しかった。子供をただ喜んだ。その声がたまらなく可愛く、たまらなく可憐に、肉体的に本能的に自分に感じられた。「生きている」、「そうして自分の子だ」こういうしっかりした感じが自分の意識にはっきりひらめいた。

ほっとした。そうして、一時に、実に、一時に自分の父親の本能が目覚めた。はっきり己は父親の通りだと思った。子供は自分にそっくりと言ってもいいほど似ている。自分は嬉しかった。たまらなく可愛かった。他人というものと、まるでちがった肉体的な愛を感じた。ふとしても、風邪をひきはしないか、よわくはないか、みにくくはないか、どこか欠陥はないか。そんなことがすぐびしびしと感じられ気になる。

子供はきれいな子だ。美しい女になると思う。蘂も丈夫だ。どっちかと言えば安産だ。安心した。蘂も安心したらしい。眠っている。武者、千家、辰弥、薫、長崎の姉等に知らせる。子供よ美しくなれ。美しくなれ。丈夫に育て。俺たちはきっとおまえを生涯愛してやる。愛しずにおられようか。お前のようにかわいい子を。美しい女になれ。美しい女になれ。3時15分前記。（蘂にかわって）

ところが赤ん坊のいる生活が始まってみると、赤ん坊はよく泣いた。狭い家の中の様相が一変してしまいます。劉生は仕事ができなくなった。仕事のできない劉生は癇癪を起こし、蘂の枕もとにありったけの皿を積みあげて拳骨でたたき割るのです。そういうときの劉生は阿修羅のようでありました。出産後の手伝いに

蘂の母が来ていました。蘂の母は泣いて劉生にとりすがり、やがて腹を立てて帰ってしまったといいます。この話は麗子が母蘂からきいたものですが、劉生の癇癪の恐ろしさを麗子も後年しばしば身をもって経験したといいます。

しかし、荒れ狂ったあとは、神に許しを乞い、すまない、気の毒な事をしたという思いでいっぱいになるのであった。こういうシーンは鵠沼に来てからの日記にもしばしばあらわれます。

この年、洋画壇ではフュウザン会に次ぐ在野団体「二科会」が誕生し、10月に第1回展が開かれました。

設立に際し、劉生は鑑査委員に押されるが辞退します。辞退した理由は二科の前衛的傾向と相容れないためだったといわれていますが、やがて劉生も出品するようになるのですから真意は分かりません。

二科会は文展に対抗して作られたのですが、そのいきさつを少しお話しておきましょう。

明治40年スタートの文展は、大変な影響力を日本の美術界に与えました。文展入選は社会的名誉を入選作家とその家族に与えていたようです。しかし文展の運営を巡る対立はそのスタート時点から激しいものがあり、日本画では、伝統的な画法を主張する旧派と伝統の回復、新生を目標とする岡倉天心を中心とする新派が、血で血を洗うような主導権争いを演じていました。大正元年の第6回文展では、日本画部内に一科（旧派）と二科（新派）の区分ができました。

洋画では、そのような激しい争いこそなかったものの『フュウザン会』や大正デモクラシー時代の波によって、ここでも運営方針を巡る対立が生まれようとしていました。

ヨーロッパ美術の新傾向を出品作に表現した若手留学生たちの作品が、不当な評価をされ、彼らを先頭に文展の審査傾向に不満が高まりつつあったのです。

そうした若手美術家の中心と見なされていたのが東京美術学校教授、藤島武二。彼は学長、黒田清輝を師としいわば文展主流の一人だったのですが師のいいなりにならない骨っぽい性格から何かと不遇をかこっており、不満分子たちがその中心に据えるには格好の人物だった。こうして藤島を中心に山下新太郎、有島生馬、石井柏亭らの不満分子は日本画の前例に倣って洋画にも二科制をと訴えますが、文部省はこれを無視したので、ついに文展と決別するのです。こうして在野の洋画団体「二科会」が誕生します。中心人物と見なされていた藤島は黒田から強力

に慰留され文展にとどまるという裏切り行為をしました。
ですから二科の文展に対する対抗心はたいへんなもので会則に「文展出品者は二科への出品を拒否する。」と明文化して反文展の立場を鮮明にしているのであると、これは第1回二科展で二科賞受賞の硲伊之助の回想によりました。

さて、麗子が1歳になる1915(大正4)年,一家は代々木北山谷129に引っ越しします。
この年の10月に現代の美術社主催第1回美術展（草土社第1回展にあたる）開催、創立同人は岸田劉生、横堀角次郎、椿貞雄、中川一政、木村荘八、清宮彬（ひとし)、高須光治などで、彼らはのちにお話しします、鵠沼をしばしば訪れる常連であります。またこの年、芝川照吉や山本貞次郎がパトロンとなります。

ところで、劉生の鵠沼訪問の最初はいつであったのでしょう。私は、武者小路を訪ねたのが最初ではないかと推測しています。白樺の人たちは明治40年代から鵠沼東屋旅館にしばしば投宿しています。なかでも劉生と仲の良かった武者小路実篤は1912（明治45）年6月竹尾房子と東屋に逗留、鵠沼の砂浜で二人は結ばれるのです。また1914（大正3）年12月から1915（大正4）年9月まで佐藤長四郎が経営する「芳藤園」（通称「佐藤別荘」と呼ばれていた）神奈川県高座郡大字鵠沼字下藤ヶ谷7365番地、今の藤沢市鵠沼松が岡2-1に9か月ほどの長期滞在をして戯曲「その妹」などを執筆しています。
武者小路はその著書「岸田劉生」のなかに「その年の暮れから僕は鵠沼に住むことになり、鵠沼に1年近く住んだ。岸田もよく来た。僕が鵠沼に住んでいた時、岸田が遊びに来たので、後年岸田が鵠沼に住むことになったのは事実と思う。」と書いています。
しかしですね、武者小路が鵠沼を引き揚げた後、すなわち1916（大正5）年、5月に劉生は鵠沼を訪れ22日「片瀬川」を描いたペン画のスケッチを残しています。また同年10月21日付の「鵠沼風景」という水彩画が残っています。これは誰を訪ねて鵠沼に来たのでしょうか。

劉生は1916（大正5）年5月鵠沼訪問の後、微熱が続き、大沢医師に診察を受けたところ右肺尖カタルと診断され、7月23日、郊外の荏原郡駒沢村新町1733にあった大学教授の別荘を借りて転居します。今の世田谷区桜新町です。当時は

郊外だったのですね。ここでは医者から野外での写生を止められていたので、もっぱら静物画を描いて過ごしました。

駒沢新町の家は立派で日当たりもよいし空気もいいが狭いのでごたごたして埃もたちやすかった。12 月には劉生は 37 度 3,4 分の熱が続き、専門の高田博士に見て貰うと左右悪いと言われ、二人とも落胆して「どうしてもあたたかい海岸で静かに一生懸命養生がしたい」と思ったのです。しかし、お金がない。とある日、白樺同人の長与善郎が訪ねて来て、今不要の金が 70 円あるからよかったら鵠沼に行くのに使ってほしいという申し出があって、さっそくほかに 80 円ばかり工面して合計 150 円ほどの費用が調達できて鵠沼に来ることが可能になったのであります。鵠沼に来てから鎌倉片瀬の長与の家との頻繁な往来には、こんな事情があったのです。

それで 1917 年（大正 6）年 2 月 23 日、劉生一家は念願の鵠沼に来ることになります。

収録中の岡田哲明講師

藤沢市生涯学習大学かわせみ学園

平成22年度後期講座：放送通信学科テキスト

平成22年11月23日（火）～12月28日（火）

岸田劉生と鵠沼

講師　鵠沼を語る会　岡田哲明

後列左から　　蓁、椿貞雄、　　片野元彦、谷岡（横堀の友人）、劉生
前列左から　照子、　　丸山行雄、横堀角次郎、
鵠沼海岸にて　神田写真館

大正十（1921）年八月五日（金）晴
九時過離床。十一時頃片野元彦絵を持って来る。割によろし。（中略）二時すぎから、蓁に誘われて、照子、蓁などと海岸へ行く。後から横堀、椿夫婦、丸山、谷岡など来る。神田写真館がいたので皆で海水浴のところを写す。（以下略）　　「岸田劉生全集 第六巻」

受講上の注意事項等

○このテキストは、2010年11月23日より6回にわたって開講する「岸田劉生と鵠沼」のテキストです。

○受講終了後「受講レポート」と「受講アンケート」の提出にご協力ください。 用紙は本テキストの最終ページに綴じ込まれています。
「受講レポート」は講師の参考に、「受講アンケート」は今後の講座企画の参考にさせていただきます。

○放送を聞き逃された方のために、貸し出し用カセットテープを用意しています。 ご利用を希望される方はお問い合わせ下さい。

■FM放送

□レディオ湘南　FM83.1MHz

□放送日　2010年11月23日(火)より　　※目次に記載

□本放送　毎週火曜日　午前　10時30分～11時

□再放送　毎週木曜日　午後　8時30分～9時

■インターネット

□ホームページアドレス

http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/manabi/data06977.shtml

□配信開始　11月23日(火)より毎週火曜日に配信開始

※配信開始以降はいつでもアクセスできます。

※インターネットで受講するには、ご利用のパソコンに必要なソフトウエアが組み込まれている必要があります。
必要なソフトウエアについては上記ホームページをご覧ください。

岸田劉生と鵠沼

重要文化財「麗子像」を描いた画家、岸田劉生は
6 年余の鵠沼時代が最も充実していました。
その劉生の生い立ちから鵠沼での生活ぶりを掘り下げます。

― 目 次 ―

第１週　はじめに／出生と生い立ち／父、岸田吟香について／画家を目指す
〔放送日〕11 月 23 日(火)・〔再放送〕11 月 25 日(木) …… 1

第２週　白樺講読／ヒュウザン会／恋愛・結婚・麗子誕生／肺尖カタル発病
〔放送日〕11 月 30 日(火)・〔再放送〕12 月 2 日(木) …… 3

第３週　佐藤別荘／松本別荘
〔放送日〕12 月 7 日(火)・〔再放送〕12 月 9 日(木) …… 5

第４週　静物画／風景画／人物画(麗子と於松)／日本画
〔放送日〕12 月 14 日(火)・〔再放送〕12 月 16 日(木) …… 9

第５週　鵠沼の生活（インフラ／商店／行事／交友）
〔放送日〕12 月 21 日(火)・〔再放送〕12 月 23 日(木) …… 11

第６週　震災直後／京都時代／鎌倉時代／おわりに
〔放送日〕12 月 28 日(火)・〔再放送〕12 月 30 日(木) …… 15

岸田劉生年譜 …… 16

参考・引用文献 …… 18

事務担当　藤沢市教育委員会　生涯学習課　大学担当
住　所　〒251-0026　藤沢市鵠沼東７－１　学習文化センター内
電　話　２２－４２１０　　ＦＡＸ　２４－５２６３
E-mail　gakubun@city.fujisawa.kanagawa.jp

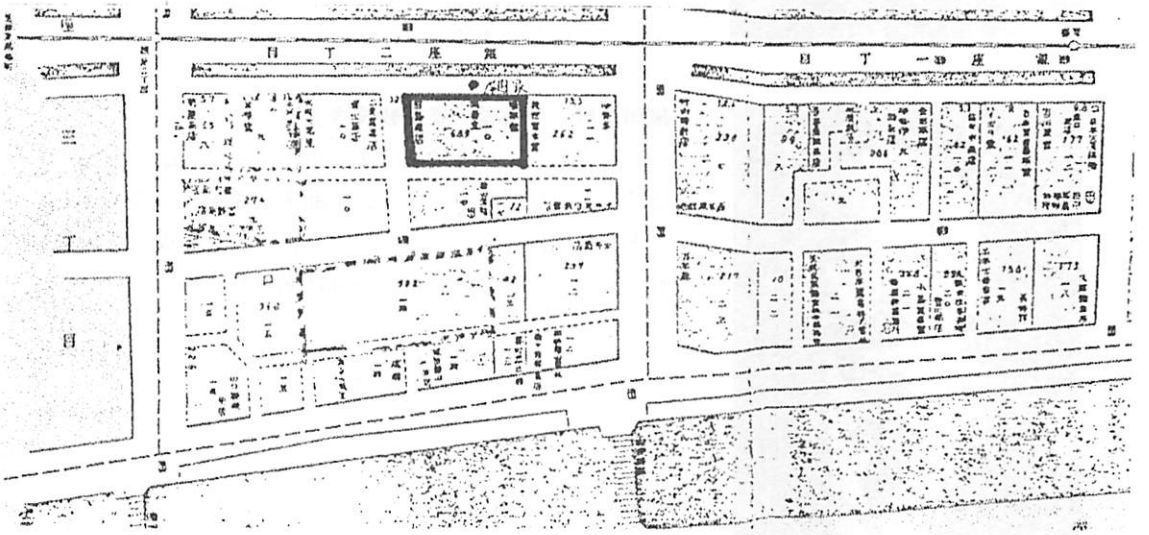
第１週

- はじめに
- 出生と生い立ち
- 父、岸田吟香について
- 画家を目指す

岸田吟香　　妻 勝子

吟香
勝子

長男	銀次郎	M6～M37/6/1
長女	柳子	生没年不明
次女	静子	生年不明～M17/1/3
三女	駒子	M15～M41/10/18
四女	福子	生年不明～T12/3
次男	艾生	M18～T9/4/14　（二代目吟香）
三男	松若	M21～S18/2/19　（三代目吟香）
五女	敏子	M23/2/10～T13/8/12
四男	**劉生**	**M24/6/23～S4/12/20**
五男	辰弥	M25/9/15～S19/10/19（宝塚歌劇団演出家）
六男	安良	M27～S4
七男	勝利	M28～S16/3
六女	照子	M29～S53/12/15
七女	菊枝	M33～M33/1/22



楽善堂の記載のある地図（明治 35 年）

銀座にあった岸田家の図
（後年、劉生が思い出しながら描いたもの）

精錡水の看板
（日本民家園）

劉生を画家の道に導いた二人

田村直臣　牧師

劉生は14 歳のとき父を失い、数寄屋橋教会で田村牧師により洗礼を受ける。東京高等師範付属中学校を中途退学して、画家になる契機となった。

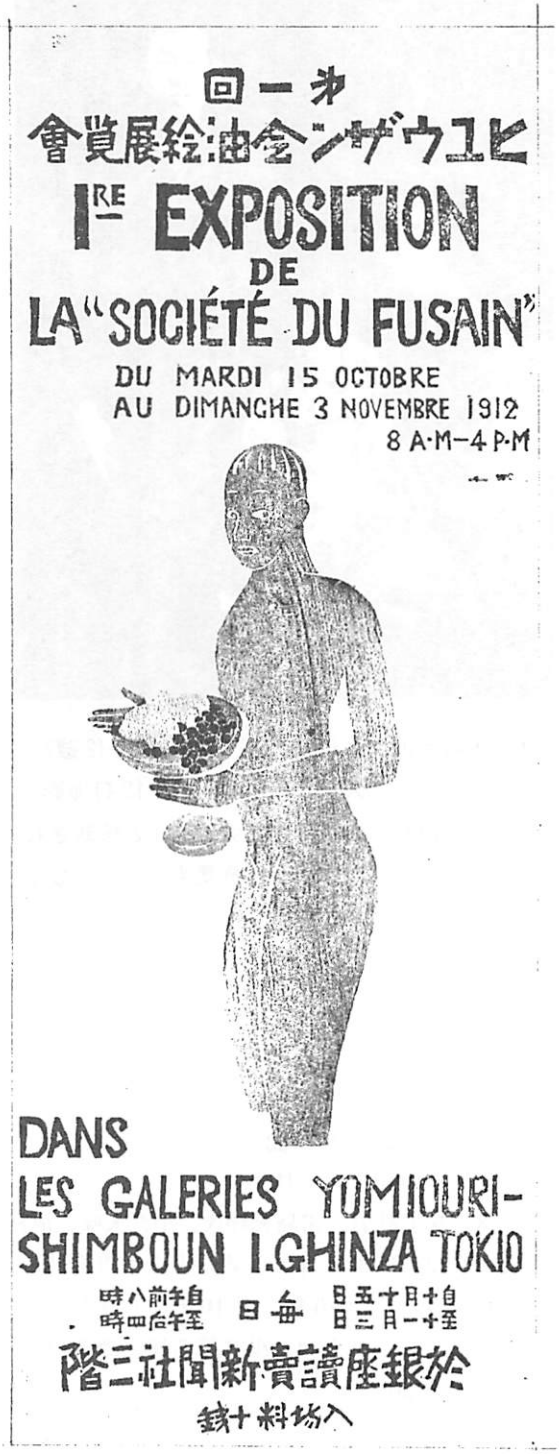
黒田清輝　洋画家・美術教育者

法律を学ぶべくパリに留学するが、美術に開眼、画家になろうとラファエル・コランに師事。帰国後、久米桂一郎とともに洋画研究所を設立。また白馬会を結成した。
劉生が学んだころ研究所は葵橋にあった。

第２週

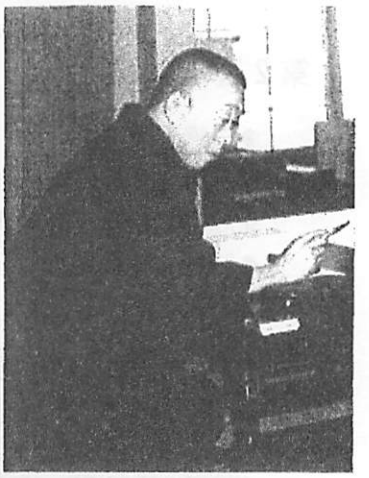
◆白樺購読
◆ヒュウザン会
◆恋愛・結婚・麗子誕生
◆肺尖カタル発病

劉生が初めて購入
した白樺の表紙



ヒュウザン会第１回展のポスターと目録
（ポスターと目録が同時に示されるのはこれが初めて）

代々木時代の劉生(25歳)蓁(24歳)麗子(2歳)
大正5(1916)年4月12日撮影
劉生はこの夏、発熱続き肺尖カタルと診断され
駒沢へ、さらに鵠沼に転地療養することになる



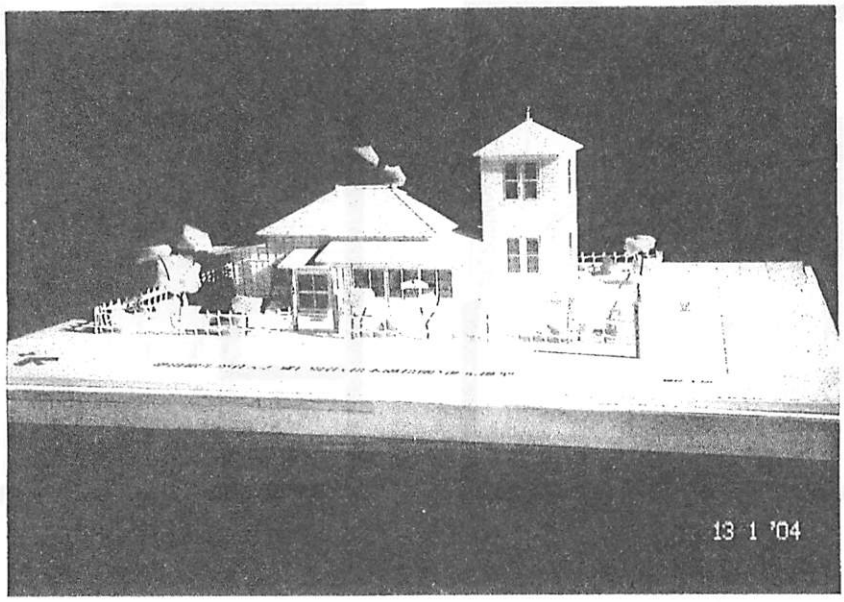
蓁の日本画の師
鏑木清方（1878～1972）

結婚式当日の蓁(しげる)の日記
大正2（1913）年7月1日
来客、弟君妹君、田島兄姉氏、小沢夫婦、清宮氏、結婚式挙行。
たび二足　64銭、菓子　みかん　千香38銭、カオール5銭、きうり2銭、豆3銭、
小松菜3銭、卵15銭、麦16銭、ちりとり　たわし7銭5厘、はたき4銭、肉20銭、
湯5銭、湯3銭5厘、湯3銭5厘、酒50銭、八百物37銭、酒20銭、しょうが3銭、
料理6円20銭

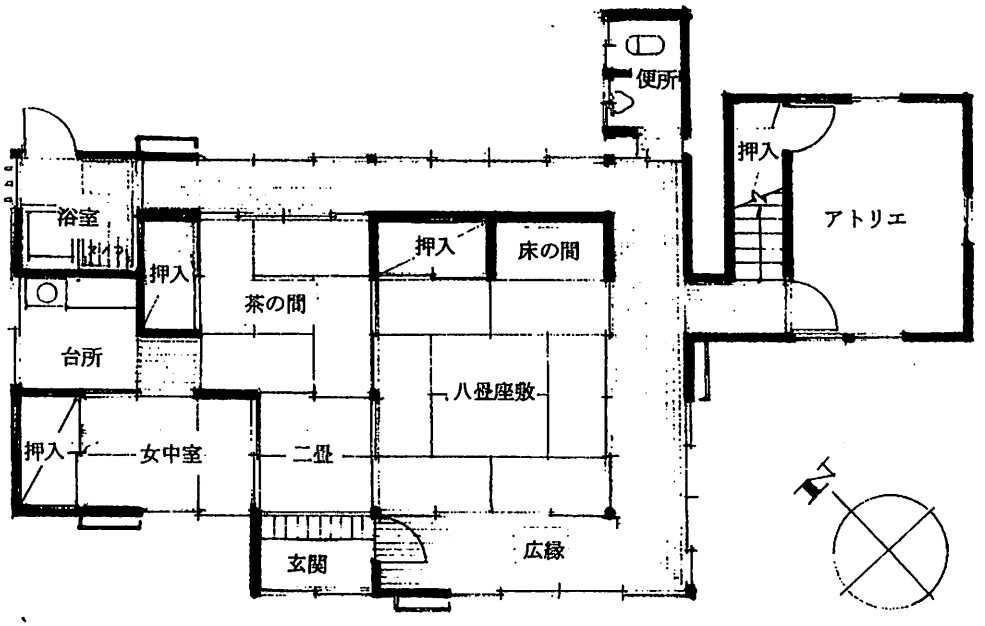
第３週

◆佐藤別荘
◆松本別荘

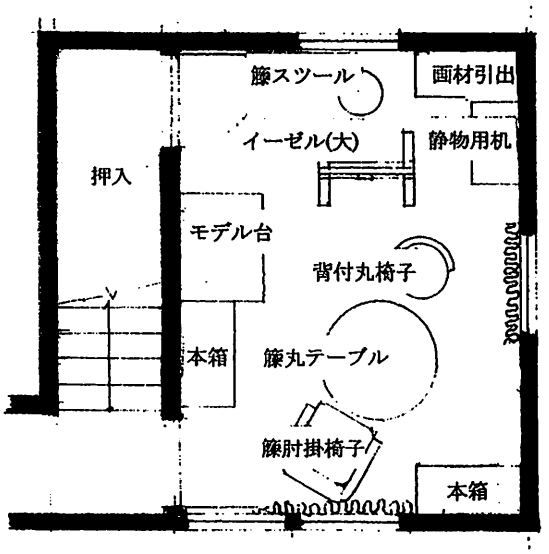
佐藤別荘・松本別荘・おマツさんの家・佐藤芳藤園の位置関係



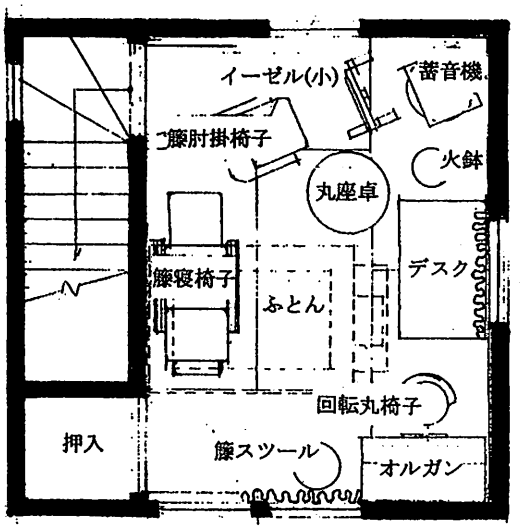
松本別荘復元模型の写真
（復元考証と模型製作は岡田哲明）



図：1 松本別荘平面図



一階：アトリエ



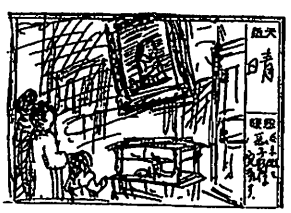
二階：書斎兼寝室

図：2 洋館家具レイアイト図

1階アトリエ

大正 10 年 10 月 6 日
「武者来訪」
武者は武者小路実篤。籐製の背もたれが高くて丸い椅子に掛けて二人は丸テーブルをはさんで対話している。後ろの窓は南側のもの、本箱も描かれている。

大正 10 年 12 月 18 日
「麗子病気なほってモデルする図」
大きいイーゼルに向かい鼓型の籐のスツールで制作中。モデル台はかなり高い台だったことが分る。

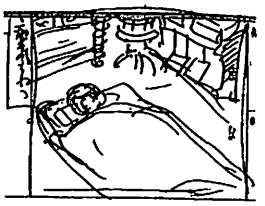


大正 11 年 1 月 7 日
「毛糸服之麗子坐像完成す」
机を二つ重ねたという静物画用の台がよく分る。

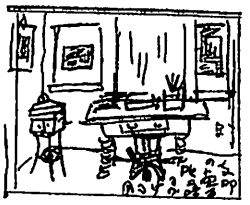
大正 11 年 1 月 30 日
「画室であげもちをたべる」
和辻から貰った灯油ストーブに油鍋をかけて家族で揚げ餅を作って食べている。卓袱台を居間から持ち込み敷物を敷いて座っている。イーゼルとスツールが見える。

大正 12 年 3 月 29 日
「梅原来訪清観図」
梅原は梅原龍三郎。テーブル、椅子、本箱や壁に掛けた絵などアトリエの様子がよく分る。
劉生の椅子が武者小路と会っている時と代わっている。

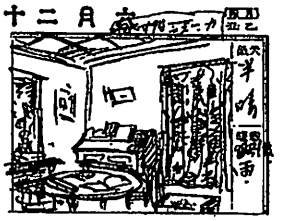
2階書斎兼寝室



大正 10 年 8 月 18 日
「病気でねる」
枕もとにデスクの脚、右にオルガンの踏み板、丸椅子の脚が描かれ東側を枕に床が取られている。

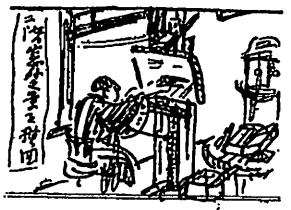


大正 11 年 6 月 1 日
「支那の画布を二階にかける図」
東面の窓を中心に両脇の壁に掛け軸が掛けてある。左の角に蓄音機が丸い台に乗せてある。蓄音機には手回しのハンドルまで描いてある。



大正 11 年 6 月 26 日
「カーテン附くの図」
東南のコーナーを見ている。丸いテーブル、オルガン、椅子デスク、南の窓下になにやら箱？、柄物のカーテン、壁は柱を見せない大壁、格子縁の天井である。二階は畳敷きであったが壁、天井、窓、ドアは洋式であった。

大正 11 年 12 月 14 日
「支那美術へ原稿かく」
火鉢と籐の寝椅子が描かれている

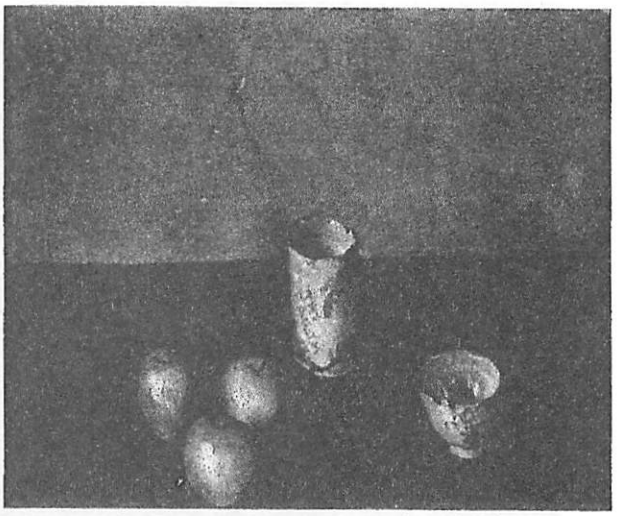


大正 12 年 1 月 18 日
「二階窓外之景を描く図」
上げ下げ窓を上に開けてイーゼルに向かっている。椅子は普段の書物のデスクのものか。丸卓に絵の具箱、その手前に筆洗オイルの缶。

大正 12 年 8 月 27 日
「二階窓外写生を始むる図」
前図と同じアングルの図だが、籐の肘つき椅子で描いている一階の接客用のセットから二階に持ってきたものであろう。

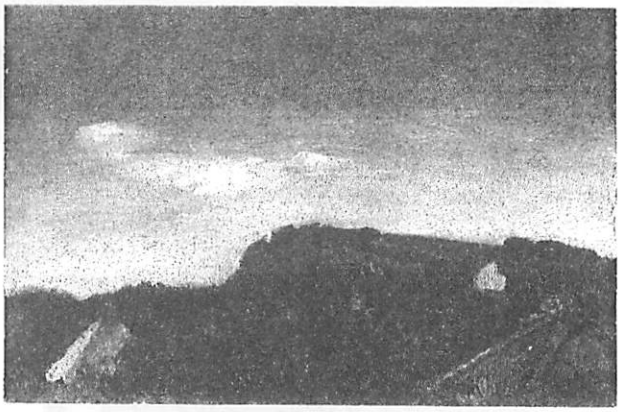
第４週

◆静物画
◆風景画
◆人物画
　麗子と於松
◆日本画



湯呑と茶碗と林檎三つ 1917 年

現在の片瀬山（湘南学園屋上より）



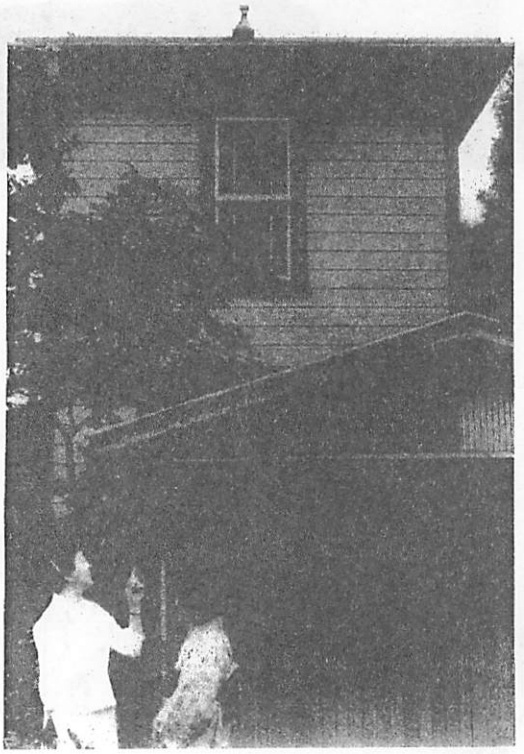
窓外夏景 1922 年

鵠沼小景：鵠沼画房窓外雪景図 1922 年、窓外春光、夏山急雨、秋日閑々1923 年

麗子像 1921 年　（重要文化財）

村娘の図 1919 年

信行之像 1921 年



旧松本別荘、劉生のアトリエ前で
40 年ぶりに再開した麗子と於松
昭和 36(1961) 年 7 月 27 日
麗子は翌年 7 月、くも膜下出血で急逝した

第５週

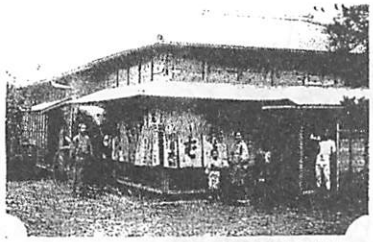
◆鵠沼の生活

インフラ

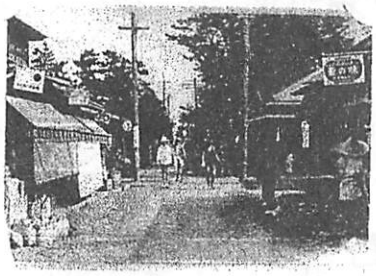
商店

行事

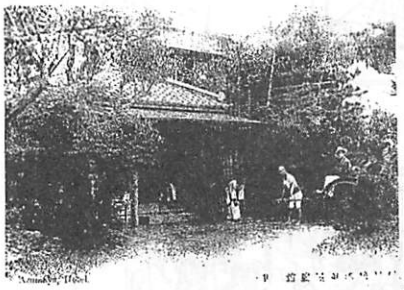
交友



大正初期　明月庵（そば屋、有田商店の前身）
大正２年創業、９年向かい側に移転、洋食店、精肉店に。跡地には八百利が創業。
（有田氏所蔵）



大正１２年（１９２３）震災以前（震災で倒壊）
左北村屋、山口屋、玉生邸の松林
右側、八百徳、鵠沼庵、中屋の入口の林



東　屋　旅　館（震災以前）

鵠沼海浜医院（震災以前）

松本別荘へ

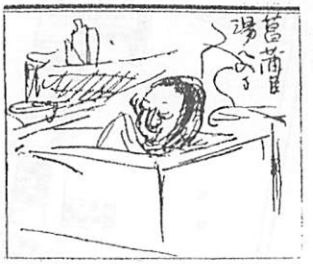
鵠沼海岸商店街　大正１５年（１９２６）以前店名地図

正月飾り

七草

節分

雛祭り

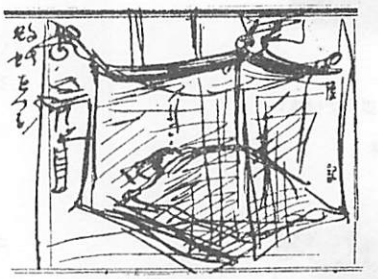


菖蒲湯

蓉日記八月二日の条に劉生が画いた鵠沼海岸雨乞竜の図

雨乞い竜

端午の節句

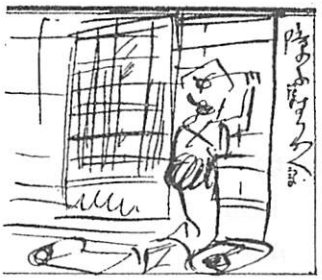


蚊帳を吊る

蠅たたき

灯篭流し

鵠沼の夜祭り



障子張り

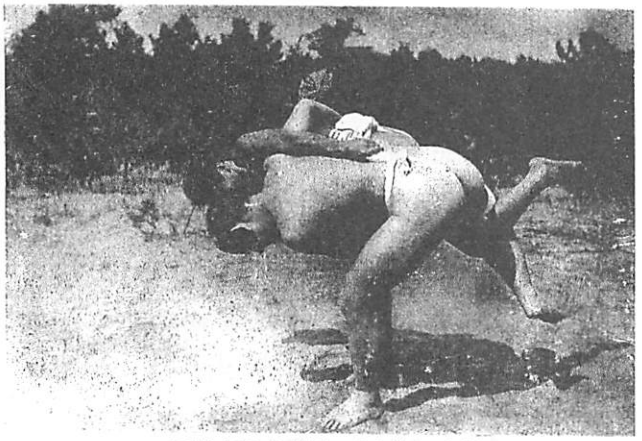
柚子湯

クリスマス

畳替え

海水浴

長唄を習う



相撲を取る劉生（手前）と椿

有田でアイスクリーム

東屋ビアホール

東屋で食事

劉生宅を訪れた人々

（作家、学者、実業家、出版関係者など）

足助　素一	叢文閣創立者
犬養　　健	政治家、作家
岩波　茂雄	岩波出版
尾高鮮之助	美術史家
川端　信一	俳人
木村荘十二	映画監督
倉田　百三	劇作家
小泉　　鉄	作家
西郷　健雄	実業家原三渓の女婿
斎藤　三郎	鵠沼小学校長
佐藤　紅緑	作家
澤田竹治郎	最高裁判事
志賀　直哉	作家
芝川　照吉	実業家
ステルンベルヒ	法学者、東大講師
住友　寛一	実業家
千家　元麿	作家
園池　公致	作家
田中松太郎	写真製版印刷
長与　善郎	作家
野島　熙正	画廊主
波多野秋子	婦人公論記者
原　善一郎	実業家
広津　和郎	作家
前田　慶治	星文館
松方　三郎	実業家
三島　章道	作家
武者小路実篤	作家
守屋　謙二	美術史家
山本　実彦	改造社
柳　　宗悦	民芸運動家
和辻　哲郎	哲学者

（画家、美術家たち）

伊上　凡骨	木版師
梅原竜三郎	洋画家
岡崎　精郎	洋画家、農民運動家、書生
柏木　俊一	草土社
片野　元彦	染織家
川幡　正光	洋画家、草土社
木村　荘八	洋画家、草土社
倉田　白羊	洋画家、
河野　通勢	洋画家、草土社
小林　欽夫	洋画家、書生
清宮　　彬	洋画家、草土社
高須　光治	洋画家、草土社
高田　博厚	彫刻家
高見沢遠治	木版刷師
高村光太郎	彫刻家、詩人
田村　　憲	洋画家、草土社
土屋　義郎	洋画家、草土社
椿　　貞雄	洋画家、草土社
長岡忠三郎	洋画家、春陽会
中川　一政	洋画家、草土社
中島　正貴	洋画家、草土社
硲　伊之助	洋画家、陶芸家、
バーナード・リーチ	陶芸家
原田彦太郎	築地「大力」
丸山　行雄	洋画家、草土社、書生
宮田　秀吾	洋画家
棟方　寅雄	洋画家、書生
森田　恒友	洋画家
横堀角次郎	洋画家、草土社

第６週

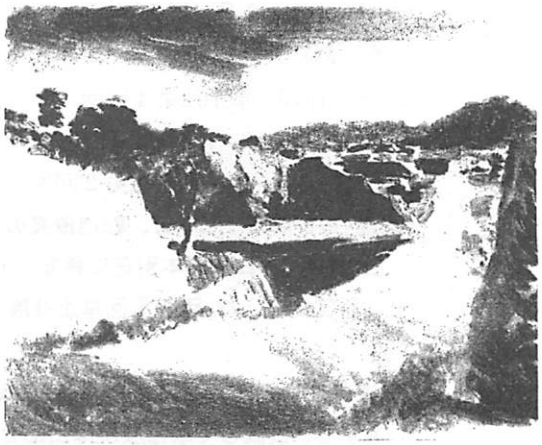
◆京都時代
◆鎌倉時代
◆おわりに

震災で倒壊した鵠沼の家
左から照子、麗子、近所の子２人、蓁、手前劉生、後近所の人２人

京都草川町の家、座敷にて

鎌倉長谷の家の庭にて

大連で写生する劉生



油絵絶筆（1929/12/1）「徳山風景」
本当の絶筆は（1929/12/14）席画の後倒れる

岸田劉生 年譜

出生

1891年、岸田吟香、勝子の7男7女の9番目、四男として東京銀座に生まれる。父、吟香は岡山美作の出、新聞記者（横浜新報もしほ草、東京日々新聞、台湾戦争従軍記者）、実業家（楽善堂創設：目薬「精錡水」を発売）、教育者（楽善会訓盲院の設立）

なお、ヘボン（James Curtis Hepburn 明治学院創設者、ヘボン式ローマ字）とは目を患い治療を受けて知り合い、和英語林集成の印刷にかかわり、目薬の製法を教わる。

学歴

東京高等師範付属小、15歳中学中退（14歳のとき父母が死に家運傾く）数寄屋橋教会、田村直臣牧師に洗礼を受ける。日曜学校の手伝いなどする。

画歴

15歳(1906) 独学で絵を画きはじめる。17歳、赤坂葵橋にあった白馬会洋画研究所で黒田清輝に学ぶ。

19歳（1910）白馬会13回展に出品入選。第4回文展に初出品入選。このとし雑誌『白樺』創刊される。

20歳(1911)、白馬会解散。東京勧業展覧会に出品。清宮のすすめで『白樺』購読、ルノワール、セザンヌ、ゴッホなど後期印象派に興味を持つ。秋、バーナードリーチ、木村荘八、柳宗悦、武者小路実篤、長与善郎ら白樺同人と知り合う。

21歳(1912)、高村光太郎経営の琅玕洞で初の個展。秋第1回フュウザン会展に出品。鏑木清方に師事していた小林蘂と会場で会う。雑誌フュウザン創刊。

22歳(1913)、春、第2回ヒュウザン会展に出品。5月ヒュウザン会解散。7月小林蘂(21歳)と結婚、代々木に新居を構える。

23歳(1914)、3月、第2回個展、4月麗子生まれる。9月二科会（山下新太郎、石井柏亭）創立。

24歳（1915）草土社第1回展にあたる現代の美術社主催第1回展に横堀角次郎、椿貞雄、中川一政、木村荘八、清宮彬、高須光治らと参加。

25歳(1916)，春、草土社第2回展。秋、第3回展

26歳(1917)、2月23日、転地療養のため、鵠沼、佐藤別荘に転居。4月草土社第4回展。6月24日、松本別荘に移転。9月二科会第4回展に4点出品，「初夏の小路」で二科賞受賞。12月第5回草土社展。原三渓、原善一郎、西郷健雄ら原一族がパトロンとなる。

27歳(1918)、6月草土社第6回展を長野で開催。9月第5回二科展に5点出品、1点落選する、憤慨して京都展には出品せず。12月第6回展。武者小路「新しき村」建設。

28歳(1919)、4月、白樺十周年記念主催岸田劉生作品個人展覧会開催、油彩65点、素描、水彩41点、彫刻2点を出品。8月、妹、照子、療養の為、鵠沼に同居。12月第7回草土社展。

29歳 (1920) 元日より絵入り日記を書き始める。1925年7月9日まで5年6ケ月あまり1日も欠かさず書き続ける。

7月日本画を画き始める。10月『白樺』第11年10月号「劉生特集号」。12月草土社第8回展。第1次世界大戦後の大恐慌、株式大暴落。リーチ英国に帰国。

30歳、1月草土社展。5月松本で個展、10月、第3回帝展に出品。11月神田で個展。この年、白樺美術館が購入したゴッホ、セザンヌの作品が展示される。

31歳(1921)、1月春陽会が創立され梅原龍三郎のすすめで木村荘八、椿貞雄、中川一政とともに客員として参加。4月パリで行われた日本美術展覧会に出品(前年の帝展出品作)される。5月個展。8月第9回再興院展に日本画を出品したが鑑査中に撤回。9月、初の日本画の個展。11月草土社第9回展(最終回)。於松をモデルにするのを止める。

32歳(1923)、5月春陽会第1回展に出品。7月パトロン芝川照吉死去。経済的後ろ盾を失う。9月、関東大震災。家屋倒壊。名古屋をへて10月京都に転居。京都画壇には劉生の入り込む余地はなく、唐画、初期肉筆浮世絵の収集に凝り、遊里で酒色に耽溺する。この年、雑誌『白樺』廃刊となる。

35歳(1926)2月末、懶惰な京都の生活環境から脱出しようと鎌倉に転居。3月、長男鶴之助生まれる。遊興癖ぬけず、上京しては遊里に遊ぶ。経済逼迫する。

38歳 (1929) 9月～11月、渡欧費用を作るため、南満州鉄道の招きで大連、奉天、ハルビンをめぐる。画会思うにまかせず落胆して27日、帰国の途につく。29日門司港着、山口県徳山の田島家に滞在。12月11日視力障害があらわれ、14日酒席で倒れる、16日腎臓炎に胃潰瘍を併発、尿毒症、容態悪化。20日、田島家にて客死。享年38歳。

注：ゴシックの部分は鵠沼滞在の時期をしめす。

参考・引用文献

書籍

「岸田劉生全集」　全十巻	岸田劉生　著　岩波書店
「父　岸田劉生」	岸田麗子　著　読売新聞社
「岸田劉生」	土方定一　著　日動出版
「岸田劉生」	東　珠樹　著　中央公論
「岸田劉生」	瀬木慎一　著　東京四季出版
「岸田劉生とその周辺」	東　珠樹　著　東出版
「岸田劉生　椿貞雄の回想から」	東　珠樹　著　雪華社
「岸田劉生晩景」	松本清張　著　新潮社
「肖像画の不思議　麗子と麗子像」	岸田夏子　著　求竜堂
「武者小路実篤全集」	武者小路実篤　著　小学館
「摘録　劉生日記」	酒井忠康　編　岩波文庫
「大正期美術展覧会出品目録」	東京文化研究所　編
「鵠沼海岸商店街 100 年の歴史」	鵠沼海岸商店街　編
「鵠沼海岸開発史の概略」	内藤喜嗣　編

雑誌・新聞

「新建築」創刊号復刻版	新建築社
「アトリエ・岸田劉生追悼号」1930/1	アトリエ社
「週刊朝日」1961/9/15	週刊朝日
「日経おとなの OFF」2007/11	日経ホーム出版社
「清春」	清春白樺美術館
「鵠沼」	鵠沼を語る会
「わが半生記」谷伊之助	北国新聞

展覧会目録

「岸田劉生展」1970 年	東京新聞社
「谷伊之助展」1974 年	和歌山県立美術館
「岸田劉生展」1979 年	東京国立近代美術館・朝日新聞社
「岸田劉生展・麗子と鵠沼風景」1980 年	西武アートフォーラム・毎日新聞社
「岸田劉生展」2001 年	神奈川県立近代美術館・東京新聞社
「岸田麗子展」2002 年	渋谷区立松濤美術館
「岸田劉生の軌跡」2007 年	うらわ美術館
「岸田劉生　肖像画をこえて」2009 年	損保ジャパン東郷青児美術館
「白樺派の愛した美術」2009 年	神奈川県立近代美術館・読売新聞社

資料提供

藤沢市鵠沼公民館郷土資料室

昭和の成長期

藤沢を中心とした文化人の集まり
—すわん會—

竹内 広弥(会員)

人と人との絆の大切さが見直される現在、数十年前に盛んだった人々の集まりについて知ることには、意義深いものがある。

一頃、都会には文士バー、文士酒場とかいった文化人の溜まり場があったが、今ではすっかり姿を消している。藤沢を中心とした集まりを調べてみると、昭和20年代から50年代にかけて「鵠沼夏期自由大学」「なぎさクラブ」「湘南文庫」「汽車会」「ロマンスカークラブ」「文化懇談会」、そして「すわん會」などがあった。こうした集まりの中で、昭和29年から50年頃にかけて盛んだった「すわん會」は、文士酒場的な集まりだったようだ。

「すわん會」について詳しい資料はないものの、当時の新聞、雑誌などをもとに、どのような集まりだったのか、探ってみる。幸い昨年9月の「鵠沼を語る会」の例会に「すわん會」の拠点となっていた「運河」の女将・河井郁子さんをお招きし会員諸氏の様子をエピソードも含め、お伺いすることができた。

「すわん會」発足

藤沢、鵠沼、鎌倉は気候風土に恵まれてか、芸術家、文士、作家、ラジオスター、ジャーナリストが多く居を構えていた。こうした時代背景のなか、昭和29年、鵠沼在住の作家・三田文学の今井達夫、早稲田文学の寺崎浩らが「藤沢から平塚までの範囲で、作家やジャーナリストたちの交流会を作ろう」と呼びかけ、始められたのが「すわん會」。

第1回の集まりは昭和29年6月、鵠沼海岸駅近くの割烹「丸政」で開催された。発起人の今井達夫、寺崎浩をはじめ各分野から20名近くが集まり、勝手気ままに放談をし、飲めば酔うほどに新語が飛び出し、予定の時間を大幅に超え夜の更けるのも忘れて続けられた。その様子は週刊カメラ(昭和29年6月30日発行)に写真入りで報じられている。

会の趣旨といっても難しいことはなく、毎日、顔を合わせたりしているのに電車に乗って知らん顔では、お互い淋しいから大いに飲んで親しみを増そうといった、親睦的なものであった。

「すわん會」の決め事の多くはジャーナリストの渡辺紳一郎が行なっていたが、実質的に会をリードしていたのは江ノ電社長の北村孟徳。事務的なことは臺灣製糖重役であり洋画家の三橋鎮郎が担当、今井達夫は、いろいろなことに口出しをしていた。

自然発生した会名

「すわん會」という会名の由来については、鵠沼の「鵠」は、くぐい＝はくちょう＝すわん、ということからきた、といわれているが定かではない。湘南新聞（昭和38年8月5日発行）に発起人の今井達夫が随筆『赤門忌由来』のなかで、「すわん會」という名前が自然発生的であったことに触れているのは面白い。

談論風発の「すわん會」

昭和33年ごろから「すわん會」は藤沢の割烹「運河」を拠点に、時には鵠沼の画家・黒崎義介宅、市会議員・葉山ふゆ子宅などで開かれてきた。会の集まり以外のときにも会員の多くは拠点となった店を訪れており、「すわん會」専用の連絡簿にいろいろ伝言が書かれていた。残念ながら、いまはその所在が明らかでない。

談論風発の「すわん會」

談論風発の「すわん會」のメンバーの多くは酒に強かったが、なかには一滴も飲めない人たちもいた。よく喧嘩もするが、しばらくすると和気あいあい、仲良く飲み交わすのが常であった。即興的に書かれた色紙なども数多く残され、「すわん會」の当時の様子を知ることができる。

文化人交流に貢献

20年近く続いた「すわん會」は昭和50年ごろ終焉するが、その間、集まりの

輪は広がり、会員名簿には文芸、映像、美術、学術、財界、マスコミなど多分野で活躍していた文化人50名ほどが名を連ねている。

会員それぞれが知人を連れてきて、会のメンバーに限らず人々の交流の輪が広がった。まさに「すわん會」は、文化人の懇談交流に一役買った会であった、といえよう。

「すわん會」会員

上田 臥牛 画

今井 達夫（鵠沼松が岡）

鵠沼には大正、昭和の文壇を賑わせた著名作家たちが数多く逗留したが、この鵠沼に居を構えて執筆活動を続けた作家は少ない。半生を鵠沼で過ごした作家といえば、先ず今井達夫が思い浮かぶ。

横浜生まれだが幼年期のほとんどを毎夏、鵠沼で過ごす。鵠沼小学校に3年のとき転入。藤沢中学（今の藤嶺学園）から慶応義塾大学予科に進み、在学中から作家活動に入った。大学在学中、関東大震災に遭い鵠沼の復興作業に奉仕している。博文館、時事新報社を経て本格的に文筆活動に入る。『青い鳥を探す法』で第2回三田文学賞受賞。そのほかの主要著書に『水上滝太郎』『脂粉の顔』『虹を踏む女』などがある。

一時、鵠沼を離れるも戦後、昭和22年から没する53年まで鵠沼に住み、この地に骨を埋めた作家であり、「鵠沼ッ子」と呼んでも過言ではない。

『鵠沼にゐた文人』『湘南の作家たち』は、大正、昭和に鵠沼を訪れた作家や画家の行動が、手に取るように分かる貴重な資料である。

昭和29年「すわん會」を結成し、20年以上にわたって文化人の懇談交流の場を主催した。

鵠沼を語る会会誌「鵠沼」50号に『鵠沼物語（震災編抜粋）』、51号に『よかったなあ、あの時代は』を寄稿している（今井没後、鵠沼を語る会は『今井達夫著作品復刻号』別冊を刊行、会誌「鵠沼」94号以降に遺稿を連載中）

三橋 鎮郎（鵠沼花沢町）

臺灣製糖重役であり洋画家。

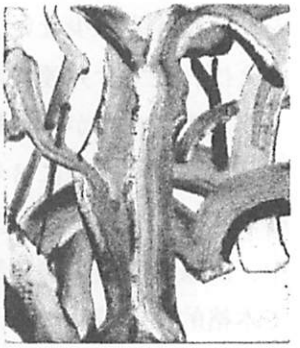
「すわん會」では、事務的な役割をこなしていた。

渡辺 紳一郎（片瀬海岸）

ジャーナリスト。朝日新聞パリ、ストックホルムなど海外支局長を歴任。NHK の人気番組だった「話の泉」「私の秘密」などのレギュラーとして、トレードマークの口ひげとウイットに富んだ語り口で人気を集めた。

「すわん會」の拠点になった店に、あるとき作詞家の藤浦洸を連れてきた。その後、店に来ると「サルの干物は来ているか」が第一声。藤浦自身も「日本の代表的な毒舌家」と渡辺を評している。会では、気難しい雰囲気を漂わせていた。

上田 臥牛（鵠沼橋）



日本画家。1946 年—50 年、日本美術院展毎回入選。まじめ一徹、「すわん會」では真剣なまなざしで議論していた。

能登の海、枯れ木などを題材とした暗い絵が多く、今井達夫はよく、どんよりした天気の日には「きょうは臥牛の日だ」、といっていた。

吉川 清（西富）

洋画家。独立美術協会会員。時宗総本山、藤澤山遊行寺塔頭のひとつ通称赤門・眞徳寺の和尚でもあった。「すわん會」の月見の宴は本堂で、和尚の描いた天井画を眺め、にぎやかに始まった。その後は藤沢柳通りの料亭に繰り出すのが恒例であった。会の拠点を割烹「運河」にした立役者で、にぎやか大好き人間であった。

佐多 芳郎（鵠沼藤が谷）

日本画家・挿絵画家。日本美術院展無鑑査 36 年間出品。藤沢市美術家協会設立会員。歴史小説挿絵の第一人者。大仏次郎「鞍馬天狗シリーズ」、山本周五郎「樅ノ木は残った」、井上靖「戦国城砦群」、柴田錬

三郎「眠狂四郎シリーズ」などの挿絵を担当した。

佐多の結婚式の写真撮影を「すわん會」の上田臥牛に頼んだが、フイルムに光をいれ唯一の写真をフイにしてしまった。だが臥牛を責めるどころか逆になだめるほどの温厚な人柄だった。

佐々木 如空（藤沢）

書道家。昭和 23 年日展に入選後、特選 11 回。10 年連続で入選している。昭和 47 年、神奈川県文化功労者受賞。

「すわん會」の拠点の近くに住まいがあり、会がなくても毎晩のように飲みに来ていた酒豪。国展の作品や色紙が飲み代にかわった。

北村 孟徳

江ノ島電鉄社長であり、随筆家でもあった。内田百閒の門下生で、『湘南新聞』や『小田急沿線新聞』などに多くの文章を残している。

会発足当初から「すわん會」の案内状を担当。開始時間を「誰そ彼（たそがれ）時」と書くなど、文筆家としてのこだわりをみせていた。北村孟徳亡き後は、今井達夫が引き継いだ。とても面倒見がよく、会の金銭的補助もしていた。会合には常に井口小夜子と一緒に来て、席も隣同士であった。

黒崎 義介 画

井口 小夜子（鵠沼桜が岡）

歌手（歌謡曲、童謡）。代表曲は「紅孔雀の歌」「月見草の花」「みかんの花咲く丘」。ラジオ体操の主題歌やラジオ歌謡の数々、「新諸国物語」など NHK ラジオと SP レコード全盛時代を代表し、民放テレビの開局段階まで第一線で活躍。上品な澄んだ歌声と明るい人柄で万人から愛された、いわば国民的歌手。「すわん會」では歌は歌わなかったが、いつも綺麗な声で

話し、華やかであった。

塚本 茂（鵠沼橘）

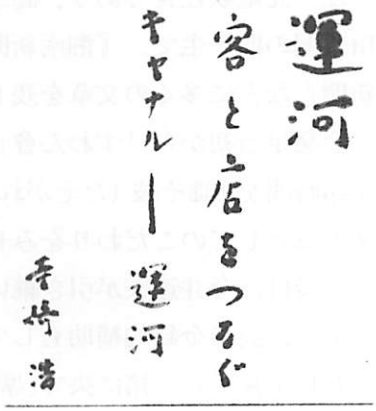
洋画家。東京美術学校在学中から帝展に入選。卒業後、鵠沼に居住、湘南中学の初代美術教師になる。戦後、教師をやめ画業に専念。文展、国際美術会に出品。藤沢市美術家協会設立、藤沢市展の発足に尽力。自宅でも門下生の指導など、もっぱら地域の美術教育及び美術振興に力を注いだ。

「すわん會」のなかでも声が大きく、口も悪い、喧嘩もよくする。しかし言っていることはいつも正論であった。面倒見がよく数々の武勇伝の持ち主。

寺崎 浩（練馬区北大泉）

作家。早稲田仏文科中退。

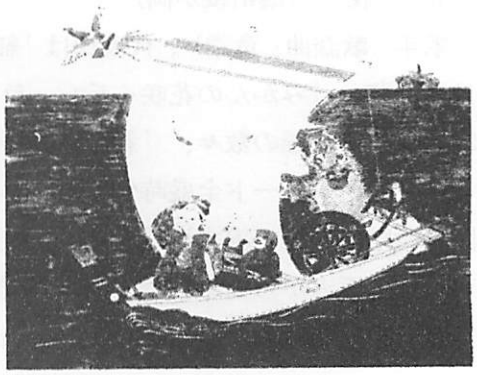
詩を西条八十、作曲とピアノを小松耕輔に、小説を横光利一に師事。同級の田畑修一郎・火野葦平らと同人誌「街」を創刊。徳田秋声の娘・喜代と結婚。丹羽文雄が鎌倉を去ると、寺崎も同じく東京・練馬に移っていった。「すわん會」の拠点となった割烹「運河」の名付け親。



黒崎 義介（鵠沼海岸）

童画家。主要著書に『よしすけ昔噺童画集』『ふじさわのむかしばなし』

昭和 27 年、鵠沼海岸に居住。鵠沼公民館開設に協力。児童絵画教室や成人のための墨絵教室を開きまた藤沢市民美術会創立に加わるなど地域の幼児教育、美術振興に貢献した。文部省児童文化功労賞受章。



鵠沼海岸の自宅を度々、「すわん會」の会場として提供していた。

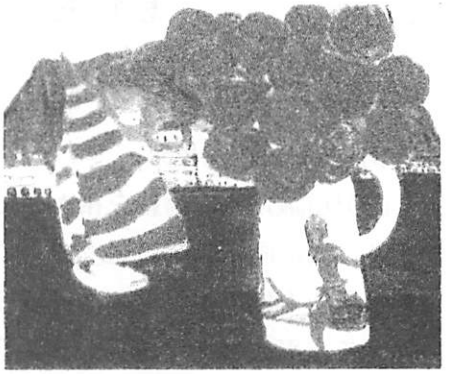
鳴山 草平（鵠沼海岸）

小説家。昭和初期に時代小説を数多く手がけるほか、自身の教師（平塚高等女学校）体験をもとにした『きんぴら先生』シリーズで知られる。

懸賞小説に入選した「極楽剣法」が、東宝で映画化され直木賞候補作にもなった。これを契機として原稿依頼も急増し、

大衆小説ブームに伴い小説家として活躍しはじめる。「すわん會」では、今井達夫に「田河水泡は、おまえさんの顔を見ないでよく、のらくろを描けたな」といわれ、「なんだこのやろう」と喧嘩になったが、しばらくすると、また一緒に飲んでいたそうだ。

鉄指 公蔵



洋画家。独立美術協会会員として豪快な画風で気を吐いていた。本の装丁も手がけ、また週刊朝日の表紙絵、新田次郎の小説の挿絵も描いていた。独特の個性を発揮し、濃厚な画風として知られた。

「すわん會」の最初からのメンバーで豪放磊落、そして細やかな神経も合わせ持っていた。

まだ若かった田口雅巳（画家）を、よく連れてきていた。

戸川 貞雄（平塚市）

作家。第7、8代と平塚市長を2期つとめた。政治評論家・小説家の戸川猪佐武は長男、作家・菊村到は次男。「すわん會」で、喧嘩が始まると静かな声で「なんだ、またか」。戸川の一言は効果抜群で、皆シュンとなっていた。

寄せ書き： 戸川貞雄（作家・平塚市長）利根義雄（漫画家）鹿島孝二（作家） 黒崎義介（童画家）佐多芳郎（日本画家）塚本茂（洋

画家）森比呂志（漫画家）佐田実（洋画家）

葉山 ふゆ子（鵠沼海岸）

市会議員。つねに住民の目線で見、考え、行動する姿勢は多くの市民に支持され、理論家で筆の立つ人としても知られた。

昭和 29 年、鵠沼海岸に中国国歌『義勇軍行進曲』の作曲者、聶耳（ニエアル）の記念碑が建てられた。それ以前の 25 年に葉山ふゆ子は、『人民中国』（英語版）に載った聶耳の記事と『義勇軍行進曲』の歌詞の翻訳を頼まれる。この翻訳により『義勇軍行進曲』は、日本全国に伝わった。

「すわん會」のメンバーたちにとっても、こうした自立する女性の生き方が新鮮に映ったことは、想像に難くない。実際、何度も葉山宅で「すわん會」が催されている。

葉山 峻（鵠沼海岸）

藤沢市議だった両親を相次いで失い昭和 34 年、早大在学中に同市議に当選。47 年、藤沢市長となり 6 期つとめ市民オペラなど市民参加の文化行政を充実させる。平成 2 年全国革新市長会会長、8 年衆議院議員（民主党）。藤沢市名誉市民。平成 22 年 3 月死去。

昭和 33 年、狩野川台風が襲来。峻は聶耳の記念碑のことが心配で、弟と一緒に膝までの洪水につかりながら記念碑を見に行った。小石交じりの大波が記念碑を押し流すのをその目で見た。記念碑の残骸はずっと海岸の松林に放置されていたが、40 年市議会が記念碑の再建を正式に提起し、9 月に再建された。

「すわん會」では母・ふゆ子と 2 代にわたる会員となった。

この人たちも「すわん會」会員

「すわん會」の、おそらく最終版となった昭和 50 年 10 月 18 日の会員名簿（佐々木如空筆）をもとにさらに調べてみると、この人たちも会員だった。

鹿島 孝二(平塚市代官町):ユーモア作家、「湘南滑稽譚」で日本作家クラブ賞受賞　**菅野 圭哉**:洋画家　**岩崎 純考**:イタリア文学者、作家・戸川貞雄の弟　**服部 清道**(庚申堂):歴史学者、藤沢中学校教諭、横浜商科大学名誉教授　**大塚 光幸**(鵠沼海岸): 朝日新聞出版局、文芸評論家、著作権史研究家　**廻神 陽三**(鵠沼藤が谷):ふとん卸業、今井達夫と慶応で一緒　**吉川 晴彦**(西富):眞徳寺(赤門) 住職、父・吉川清と2代にわたる会員　**三橋 善太郎**(藤沢):台町郵便局長　**田中 直樹**(鵠沼松が岡):ダイヤモンド社　**赤井 知英**(鵠沼花沢町):産婦人科医　**並木 英子**(川名):箏　**塩野 周作**(川名):報知新聞記者・雑誌編集者　**羽根 万象**(片瀬):日本画家　**真鍋 元之**(辻堂):小説家、大衆文学研究家　**畑 正世** (藤沢):労働運動　エスペラント運動。日精病院院長　**岩間 鶴夫**(鵠沼桜が岡):映画監督(松竹大船)　**倉島 竹二郎**(鎌倉市腰越):歴史・時代小説家、囲碁将棋観戦記者　**棟田 博**(茅ヶ崎市東海岸南):大衆作家　著書に「拝啓天皇陛下様」　**原 圭一郎**(鎌倉市腰越):小説家、原敬の養子、著書に「原敬日記」　**上田 健次郎**(鎌倉市浄明寺):作家、文春の「話」編集、登山家　**田辺 秀**(横浜市神奈川区):音楽評論家　**松木 文雄**(二宮町二宮):藤嶺藤沢副校長　**西賀 一次**(鎌倉市材木座)　**添田 知道**(大田区東馬込):演歌師、作家、評論家。添田唖蝉坊の長男　**北村 孝子**(東京):北村孟徳夫人　**利根 義雄**(庚申堂):漫画家、藤沢税務署に勤務していた久里洋二は仕事で利根を訪ね、その縁で師事し漫画家になる　**松崎 正史朗**(本町):マツザキ画廊　**髙橋 正路**(鵠沼):俳人　**池辺 栄**:江ノ島電鉄専務、作曲家・池辺晋一郎の父　**原 研吉**:映画監督(松竹大船)　**栗原 光三**:湘南新聞社社長　**毛利 基治**(藤沢):小児科医　**津村 秀介**:推理小説家　**辻本 浩太郎** (辻堂太平台):写真家　**甘粕 三郎**(片瀬海岸):市会議員、太安興業社長　**青木 泰夫**(藤沢):俳人 (「波」主幹)　**古山 登** (鵠沼海岸):集英社編集者　兄・古山高麗雄は芥川賞作家

＜出典＞

週刊カメラ(S29.6.30)　湘南新聞(S38.8.5)　小冊子「鵠沼ゆかりの文化人」　会誌「鵠沼」別冊 今井達夫著作品復刻号　中華人民共和国駐日本国大使館HP　河井郁子所蔵作品　小冊子「運河 四十五年」

(たけうち ひろや)

＜事業報告＞

今は忘れ去られた
鵠沼の女流作家　内藤千代子

「鵠沼を語る会」は鵠沼ゆかりの三人の作家―内藤千代子、今井達夫、阿部昭を事業計画のテーマとして取り上げてきたが、そのなかで3年余り継続している内藤千代子プロジェクトについて述べてみたい。

「鵠沼にゆかりの深い、今は忘れ去られた人気女流作家・内藤千代子の作品に、もっと多くの人に接してもらいたい」というのが、このプロジェクトの趣旨。

内藤千代子は明治末から大正にかけて彗星のように文壇に登場し、彗星のように光芒を放ち、彗星のように消えていった作家である。幼少時代から鵠沼に住み31歳でこの地でその生涯を閉じ、今ではすっかりその存在は忘れ去られている。

内藤千代子の作品にはモガ（モダン・ガール）的な題材が多いが、当時すでにCD 鵠沼の海で『浪乗』に興じたり(生ひ立ちの記)、槍ヶ岳に日本女性として初めて登頂したり(女學世界-日本アルプスへ)と千代子自身、モガの走りであったのだろう。千代子の作品を改めて読んでみると、今の時代に十分通用するものである。

内藤千代子の書物は読みたくても入手が難しく、国立国会図書館など数ヶ所の図書館を除けば蔵書がなく藤沢市の図書館においても然りであった。幸いなことに鵠沼を語る会では、多くの内藤千代子作品を所蔵していた。

これは塩沢務元会長が内藤千代子に注目しその書物を集められたもので、後にご遺族から塩沢文庫の一部として鵠沼を語る会に寄贈された。そして内藤千代子の著書は、古書市場でも入手困難であることが分かった。

内藤千代子の作品には鵠沼の情景描写も多いので、作品を通して当時の鵠沼を知り、鵠沼に対しての関心をさらに深めて欲しいという思いで、いくつかの事柄に臨んだ。

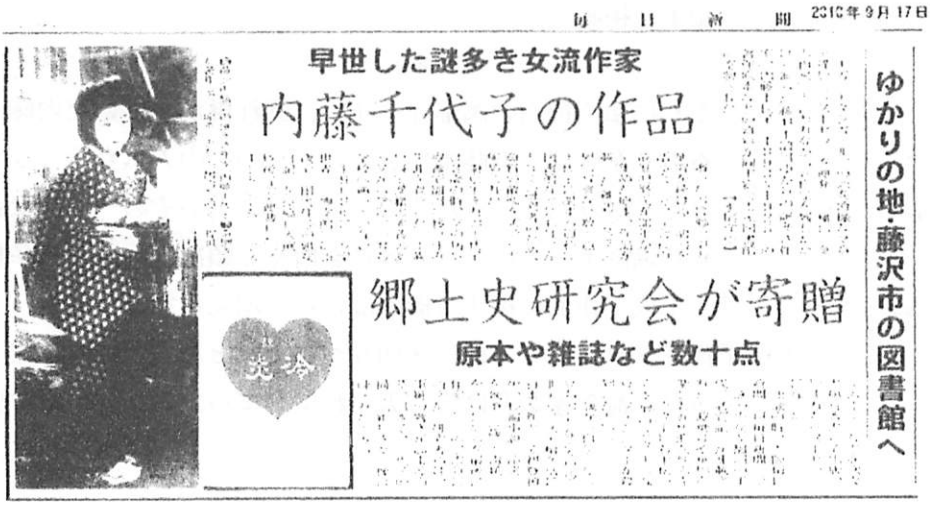
原本は総合市民図書館で保存管理

1) 原本は一サークルで所蔵するのではなく、管理体制の整った公共機関に寄贈。
2) 貸出用に複製本を作成し図書館に寄贈。
3) より多くの人が作品に触れることが出来るよう、ホームページに内藤千代子作品を掲載。

内藤千代子書籍類寄贈一覧

	書　籍　名	総合市民図書館			鵠沼市民図書室
		原本	複製本	複製本データCD	貸出用複製本
単行本	スキートホーム	1冊		1枚	1冊
	ホネームーン	1冊		1枚	1冊
	エンゲーヂ	1冊		1枚	1冊
	生ひ立ちの記	1冊		1枚	1冊
	惜春譜		1冊	1枚	1冊
	冷　炎	1冊		1枚	1冊
	春　雨	1冊		1枚	1冊
	毒　蛇		1冊	2枚組	1冊
女學世界	女學世界　第8巻第15号 ＜田舎住居のて處女日記＞	1冊	1冊		1冊
	女學世界　第14巻第1号 ＜生ひ立ちの記＞	1冊	1冊		1冊
	女學世界　第14巻第8号 ＜吾がアルバム＞	1冊	1冊		1冊
	女學世界　第15巻第5号 ＜木の芽草紙＞	1冊	1冊		1冊
	女學世界　第17巻第5号 ＜毒蛇＞	1冊	1冊		1冊
	＊ 女學世界　第11巻第2号 ＜夢より醒めた女＞	1冊	1冊		1冊
	五々乃春　河岡潮風著	1冊			
	内藤千代子資料ファイル （鵠沼を語る会作成）		2冊組	1枚	2冊組

2009年11月26日、総合市民図書館で贈呈式。図書館：古谷一幸館長/内藤彰主幹、鵠沼を語る会：内藤会長/渡部副会長/竹内運営委員が出席
＊ 2010年9月13日追加


毎日新聞 2010年9月17日

早世した謎多き女流作家

内藤千代子の作品

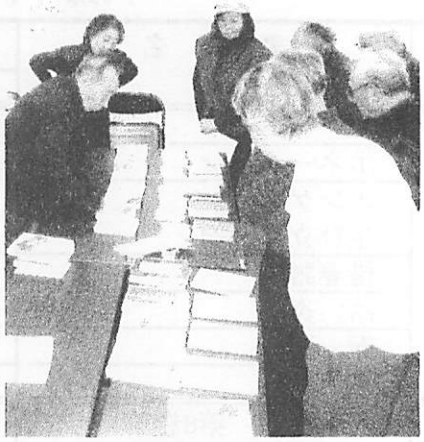
郷土史研究会が寄贈

原本や雑誌など数十点

ゆかりの地・藤沢市の図書館へ

内藤千代子書籍類寄贈が新聞報道された

原本保存の依頼先については、いくつか候補があって試行錯誤したが、幸い藤沢市総合市民図書館が当会の申し出を快く受けてくれた。2009 年 11 月 26 日、単行本ならび女學世界の原本(13 冊)/複製本/複製本データ CD/内藤千代子資料ファイル（寄贈リスト参照）を寄贈した。



寄贈品の最終チェック

寄贈した原本は現在、総合市民図書館で保存用桐の箱に収められ、貸し出しには複製本が使用されている。鵠沼市民図書室にも同様に複製本と資料ファイルが置かれ、書籍の貸し出しが行われている。これら複製本ならびに CD データの制作に関しては、杉本辰夫会員に負うところが大きい。

「鵠沼の女流作家　内藤千代子展」開催　原本寄贈が新聞報道される

2010 年 8 月 16 日～10 月 12 日、藤沢市総合市民図書館で「鵠沼の女流作家　内藤千代子展」が開催され、寄贈した原本が展示された。

この展示にあわせ同年 9 月 13 日、市役所市政記者クラブで内藤千代子書籍に関する総合市民図書館の記者発表が行われた。神奈川新聞(9/14)、毎日新聞(9/17)、東京新聞(9/19)さらにローカル誌として多くの読者を有するタウンニュース(10/22)に内藤千代子書籍原本寄贈の記事が掲載された。

＊

2 月上旬、久しぶりに鵠沼神明の萬福寺を訪れ、倒れ掛かっていた内藤千代子の墓が直されていることを確認。内藤千代子というかつての人気女流作家の再評価はなされるべきだし、取り組んできたこのプロジェクトがその一助になればという思いである。4 月以降ホームページの容量を増やし順次、内藤千代子作品を掲載してゆくので、千代子作品に接する機会はさらに増えるだろう。

ここらで内藤千代子プロジェクトに一区切りつけたいところだが、なぜそれほどまでに人気があった女流作家が今は忘れ去られてしまったのか、謎は尽きない。

（文責：竹内 広弥）

＜事業報告＞

今井達夫遺稿　活字化と保存

数年前、今井クニ夫人が達夫と長年暮らした鵠沼松が岡 3-14-9 の自宅を引き払う際、今井達夫の遺稿、遺品（手書き原稿、新聞雑誌の切り抜き、日記、雑誌など）を、鵠沼を語る会に寄託された。

今井達夫は幼少時から鵠沼に住み、作家となって大田区大森馬込に 20 年暮らしたが、戦後、また鵠沼に戻り、鵠沼でその生涯を閉じた。こよなく鵠沼を愛した作家今井達夫の遺品である。会では、これらの資料の措置が懸案となっていた。なかでも、未発表原稿とおもわれるダンボール一杯の自筆原稿は活字化して、読めるようにしたい。

2007 年の事業計画で、未発表原稿は会員が手分けして逐次パソコンに入力し、会誌「鵠沼」に掲載発表していくことになった。

現在、入力済は 13 作品、うち「鵠沼」に掲載したのは本号で 7 作品目である。活字化した後の生原稿も、どう扱ったものかが宿題になっていた。

県立神奈川近代文学館に寄贈

このプロジェクトを担当する岡田会員は 2010 年 7 月、県立神奈川近代文学館を訪れ、北村陽子資料課長と面談、「今井達夫の資料があるが…」と話したところ「是非文学館に置きたい、寄贈して頂けるか」とのことであったので、同月の運営委員会に諮り、「近代文学館が受け取ってくれるならば異存はない」と委員全員一致で寄贈することに決まったのである。

2010 年 8 月 18 日、文学館から北村課長他 1 名が来られ、上記 13 作品と代表作「水上滝太郎」の生原稿（原稿用紙 677 枚）、計 14 作品の原稿を寄贈した。

13 作品とは『指の輪』95 枚、『花弁の虚』42 枚、『望郷』38 枚、『家犬三代記』43 枚、『幻聴について』29 枚、『左手の指紋』29 枚、『遺言書』29 枚、『耕二郎の老年』23 枚、『香煙の壁』20 枚、『秋の蛇』16 枚、『相州大山豆腐塚』8 枚、『南天の赤い実』5 枚、『散歩のできる街』5 枚である。

2010 年 9 月 8 日、新聞雑誌の切り抜き、自筆資料メモ類、日記、書簡、台本、校正刷、雑誌類を寄贈した。これらは、「鵠沼を語る会寄贈資料リスト（2010/9/8

受贈)」として12月10日、鵠沼を語る会あて明細なリストが送られてきたが、その数はじつに雑誌類50冊、切り抜きなど資料500点余になる。

なお、『神奈川近代文学館』第111号(2011/1/15発行)という定期刊行物の8ページに資料受贈報告という欄があり今回、鵠沼を語る会が寄贈した今井達夫の遺品の内容が報告記載されている。

資料受贈報告

◇「鵠沼を語る会」から、長年鵠沼に住み、その地で没した今井達夫の資料として、代表作「水上滝太郎」および未発表作品を含む原稿十六点、三田文学賞受賞作「背い鳥を探す方法」ほかの手入れ切抜や一九四一年十二月一日からの日記を含む戦中、戦後の日記三冊のほか、校正刷、執筆・関連切抜など特別資料五百点、執筆誌ほか雑誌五十冊。

神奈川近代文学館　第111号

大田区立郷土博物館にも

今井達夫は大正13年から昭和17年末までの約20年間、東京都大田区大森馬込に住んだ。いわゆる大森文士村にである。

じつは神奈川近代文学館に寄贈しなかった未発表原稿が2篇ある。これは『馬込文学村二十年』(原稿用紙365枚)という大作と、もう1篇は冒頭部分16枚が欠如した352枚の表題不明の原稿だが、内容を読んで見ると、これも『馬込文学村二十年』の別稿らしいのである。2作とも昭和42年に今井が脳溢血で倒れる以前に書かれたものであることは、万年筆で小さな文字で書かれていることから明らかで、病後は左手でボールペンを使い大きな文字だからその判別は容易である。

平成3年、産経新聞は「馬込文士村」を連載したが、その37、38回にこの作品に関する記述がある。その要旨は、以下のようである。

『馬込文学村二十年』は第3校まで終って後は出版するのみという段階まで来ていた(筆者注:残念ながらこの第3校は現存していない)のを、突如、出版取りやめになった。そのいきさつは、おなじ文士村に住んだ榊山 潤が『馬込文士村』を昭和45年東都書房から出版し、ほぼ同時期に出版しても売れないだろうと一時見送られた。しかも今井達夫は榊山の『馬込文士村』の書評を新聞に書いていて、それは〈…つまり、この「馬込文士村」にあらわれる馬込は、殆ど私の記憶に残っている事実ばかりの時期で懐旧の情にたえない。そればかりではない、近く市場に出るはずの私の「馬込文学村」という一字違うだけの回想録と表裏一体をなすというか、正統二編というべきか、それを書き上げた私にとってはさらに親しみを感じざるを得ないのである。(中略)私は大正13年から昭和17年末ま

で馬込の住人であった。馬込を去ってからの著者（榊山）もしばしば来訪して、顔を合わせれば共に酒を飲む間柄が続いたから仲間意識も消え去らなかった。表裏一体をなすとはその意味でもあり、正統二編などといったのは著者が去ったてからの馬込を私が書いたことを指す。そこには彼の知らない話題だ多々あるが…〉というものである。

また今井の『馬込文学村二十年』の序文を川端康成が書くことになっていたのが、今井が川端に約束の序文を貰いに行くと「そんなものは書いていない。」と川端が言ったので、今井は大いに怒って帰って来た。川端は昭和 47 年逗子のマンションで自殺してしまうから結局、序文は書かれずじまいになった。『馬込文学村』は左手で書いた作品の一つだと義弟の平松幹夫氏が話した。というのであるが、今回の資料は右手で書かれており、今井達夫は、すくなくとも榊山の本が出る数年前から「馬込」を書こうと、想を練り、草稿を 2 作、遺していたことになる。第 3 校になった原稿が果たして左手で書いたものであったかどうかは不明だが、今やこの草稿が『馬込文学村二十年』の内容を知る唯一の手がかりである。

いま、この貴重な原稿を土岐臣道会員（大田区立郷土博物館友の会会員でもある）が活字化中であり、ほぼ 70%を終わっているという。鵠沼を語る会としては作業が完了したら原本を大田区立郷土博物館に寄贈する予定でいる。

資料提供その後

折しもこの文章を執筆中に、神奈川県立近代文学館から以下の内容のポスターと〔新収蔵資料展 2010 年度では今井達夫先生「水上滝太郎」原稿を会場で展示させて頂いております〕という断りの文面が届いた。

2011 年 3 月 5 日（土）～4 月 17 日（日）

萩原井泉水と「層雲」100 周年記念展

同時開催

新収蔵資料展 2010 年度

常設展「文学の森へ、神奈川の作家たち」展

第 2 部　芥川龍之介から中島敦まで

（文責　岡田哲明）

＜事業報告＞

相模国準四国八十八ヶ所 研究報告と講座

「江戸時代 鵠沼村庶民の弘法大師信仰」(講師:圭室文雄氏　2008 年 9 月開催・鵠沼公民館サークル共催講演会）を聴いて、その内容にとても興味を持った。さらに、江戸時代末期につくられた「相模国準四国八十八ヶ所」が鵠沼の住人、浅場太郎右衛門によるものだということを知り、この八十八ヶ所札所を会員の手で調べてみたいという思いに至った。これが 2009（平成 21）年度事業活動のメイン・テーマを「相模国準四国八十八ヶ所」とした経緯である。

2009年6月7日の例会時に史跡巡りとして鵠沼の9ヶ所の札所めぐり（会誌99号に掲載）をしたのに始まり、同年9月からは札所現状調査が開始された。同年11月7-8日の公民館まつりでは、“相模国準四国八十八ヶ所札所をご存知ですか―鵠沼の札所を巡ってみました”のタイトルで旧鵠沼村の札所を中心に紹介した。身近なところに、このような札所があることに来場者は高い関心を示された。

大正時代の中ごろまでは「相模国準四国八十八ヶ所」札所めぐりが湘南の村人のレクリエーションのひとつとして春の彼岸の頃、4 日の行程で楽しまれていたという。心のよりどころを求める現代人にこそ、この「相模国準四国八十八ヶ所」の存在を知っていただきたい、という思いを込めて2年越しのプランとなった。

*

「相模国準四国八十八ヶ所」については、これまでいくつかの資料・文献・書籍があるが、その後の変化などを念頭に入れ、現状はどうなっているか調べた。大師像の有無・保管状況、周りの環境などを調査項目に会員が手分けして調べ、その結果を会誌第100 号「相模国準四国八十八ヶ所」記念号とし、札所の現状調査と圭室先生の講演録ならびに参考文献リストなどの資料とを併せて掲載することとした。

公益的市民活動助成事業に認定

2009 年 9 月から翌年の 1 月の間に 88 ヶ所の札所を 4 つの班（A：藤沢東部・鎌倉地区　B：鵠沼・藤沢北部地区　C：辻堂・茅ケ崎東部地区　D：茅ヶ崎西部・寒川地区　各班 22 ヶ所担当）に分かれ調べた。現状調査に当たっては、調査内容に統一性をもたすため所定の調査票を用いた。

札所の現状調査を終え会誌 100 号をどのような形態にするか検討している頃、藤沢市公益的市民活動助成事業のことを知り、応募することにした。2010 年 1 月 27 日、企画書を提出。第 1 次書類審査に通り、3 月 7 日の第 2 次審査で企画の公開プレゼンテーションに臨んだ。わずか 5 分間の持ち時間での説明(別に質疑応答 5 分)は厳しいものであったが、幸い 13 団体のうち第 2 位の高得点で平成 22 年度藤沢市公益的市民活動助成事業に認定された。

企画書の段階では会誌第100号だけに調査結果などを掲載するプランであったが、プレゼンテーションでは公益性を高めるため会誌発行(120部)に加え、同じ内容のものを低コストの白黒版でガイドブックとして刊行(130部)、あわせてホームページでも公開することを盛り込んだ。

審査委員から事業の公益性について質疑があったが、ガイドブックの増刷、ホームページで対応するということが評価されたのではないかと思われる。この助成事業に認定されたことにより申請事業経費の半額(16万円)が市より助成され、会誌「鵠沼」第100号は八十八ヶ所の札所すべてがカラー版の「相模国準四国八十八ヶ所」特集号として、2010年4月30日に発行された。

文書館主催の教養講座の場でも

2010 年11 月13 日開催の藤沢市制 70 周年記念「歴史講演会と研究報告」(藤沢市文書館主催)の場でも圭室文雄先生の講演に続き、200名程の方々に「相模国準四国八十八ヶ所」札所の現状について調査報告の機会を頂いた。 この報告会での発表は、圭室先生 (当会会員)の後押しがあってのこと、と認識している。

「歴史講演会と研究報告」の場で調査報告

さらに2011年1月27日/2月3日に鵠沼公民館主催の「旧鵠沼村八十八ヶ所札所巡り講座」では市教育委員会から講師依頼があり、20名近い方々に「相模国準四国八十八ヶ所」のお話と鵠沼の9ヶ所の札所めぐりを楽しんでいただいた。

2010年12月末には、会誌「鵠沼」100号「相模国準四国八十八ヶ所」特集号の内容をホームページに掲載。どなたでも札所の現状について知ることが出来るようになり、この事業の公益性は一段と増したといえよう。　　(文責：竹内 広弥)

多摩と湘南

― 私の二都物語 ―

〔その2〕

植松 民也（会員）

前号に書いた文章を改めて読み直してみると、どうも自分の事を書きすぎたようである。もともとは語る会の会員でありながら、あまり手伝いをしなかった言い訳でも、という不純な動機から書きはじめたのであるが、身元不明者のままでは仕方なかろうと思い、書いているうちに長くなってきて、とても一回分では収まらなくなったのである。また“二都”などといっても個人的なものに過ぎず、他人にとって無関係のものを並べてどうするの、という見方があるかも知れない。

しかし一見無関係と思われるものでも、意外なところで深いつながりがあることもあり、比較対照することによって、それぞれの特色が明確になってくるということもある。また海外に出てみてはじめて、国内では気が付かなかった自分の国の特質が見えてくることもある。国内でもお国自慢の多くは、他を知らないことで成り立っているといっても過言ではない。

そこで今回はすこし視野を広げて、相模と武蔵の関係などから考えてみたいと思う。

6．相模と隣国・武蔵

相模と武蔵をまず地理上の位置関係でみると、この二国は関東平野の西南部にあり、南北で隣接している。二つの国名の起こりについては、もとは一対だったムサカミとムサシモの各一音が消えて出来たとの説がある。しかし、古くは武蔵が東山道に属していたので、カミ・シモの関係は成り立たないようだが、面白い説ではある。

鶴沼の東を流れている境川は、上流部では武蔵と相模の境界であり、下流部は相模国高座郡と鎌倉郡の境になっているが、河口部の地名によって片瀬川とも呼ばれている。

鎌倉の東側の朝比奈切通しを抜けると、そこは武蔵の金沢であり、北条実時の

別邸の蔵書が金沢文庫として公開された。その周辺の六浦は、鎌倉の外港でもあり、中国の瀟湘八景にちなんだ金沢八景も有名になって、相・武にまたがる文化圏を形成していたともいえる。

その後、金沢文庫は北条氏の没落とともに荒れて、蔵書の一部は江戸城の紅葉山文庫や、小野篁を創立者と伝える足利学校（文庫）の蔵書になって重要文化財に指定されているものもある。明治以後、神奈川県立の文庫として復活した。

相武の読みは、古くはサガムとも読まれたが、サガミと区別し難いこともあって現在はソウブが一般的である。これを逆にした武相を普通はブソウと読むが、大戦前に鶴川の田舎家を入手した白洲次郎は「武相荘」と名付けてブアイソウと読み無愛想に通じると悦に入ったという。にもかかわらず、正子夫人の活躍もあって有名人の来客も多かったらしい。〔注：武相荘は今、有料で公開している〕

旧鶴川村は現在、東京都町田市に属しているが、小田急と JR 横浜線が交差する町田駅のすぐ南側を、小さな堀割のような境川が流れている。その上の短い橋を渡れば、そこは神奈川県相模原市で、町田とは街つづきのようである。つまり、旧武蔵国多摩郡の町田と相模原とは一つの街も同然なのである。それもその筈で、明治初年には多摩郡が神奈川県に属していたのを、多摩川が東京の水源であるとの理由から多摩郡を東京に移管してしまったのである。その結果困ったのは、下流の川崎市で、その対策として深井戸を掘ったが、地盤沈下などの問題が起こり、はるばる遠くの相模川から水を引かざるを得なくなったのである。水源対策のための多摩郡東京移管は、本当は反権力的な多摩の壮士たちを神奈川県議会から排除するための口実だったといわれている。この多摩郡の分離移管に反対する住民は「多摩はもう終わりだ」と大掛かりな葬式行列まで行ったという。

時は移って、現在の多摩は、地方の県以上の実力が付いているので、一つの県として独立させようという元気な人たちもいる。しかし東京周辺から都心へ向かう通勤電車は超満員で、道路も渋滞が続き、多くの面で都県の単位ではどうにもならなくなってきている。やはり従来の都や県の境界を越えた、生活しやすい首都圏として再構成すべき時が来ているように思う。

7．相武の「一宮」と神々

古来の相模と武蔵の伝統行事を比較したとき、面白い対照を見せていることの一つに、一宮（いちのみや）がある。一宮の地名は二宮（にのみや）、三宮（さんのみや）…の名とともに全国にあるが、

制度上の裏付けとなるものは国分寺の場合と違って、はっきりしたものは見当たらないようである。いずれにしても、それぞれの国内を代表する有力な神社であるが、その数は国によって異なり一定しない。

相模の場合は寒川の一宮から大磯の総社六所神社まで入れて6社になるが、武蔵では一宮から六宮に府中の総社大国魂神社を加えて7社になる。

相模の一宮は相模川中流左岸の寒川神社で問題はなさそうであるが、興味深い神事が伝えられている。5月5日に行われる国府祭のとき、大磯の神揃山に相模の5社の神輿が集まり、座問答が行われるのである。それは4本の忌竹の囲いの中で一宮寒川神社と二宮川勾神社の神官が交互に3度、虎の敷き皮を前に進め、三宮比々多神社の神官が仲裁に出て、翌年まで繰り越すという宣言をして神事を終了するというものである。これは上代の相模国一宮争いを今に伝えるものといわれ、国府の移転とも関係しているようである。

なお三宮は伊勢原に、四宮前鳥神社と五宮八幡神社は平塚に所在している。

一方、府中の武蔵総社大国魂神社の大祭は、相模と同じ5月5日で、神輿が出る夜間に灯を全部消すので「くらやみ祭」といわれている。神輿の前を直径2メートル余りの大太鼓6台が先導し、一宮から六宮に次いで大国魂大神と御霊大神の合計8台の大神輿が夜間渡御する。6社の名を列記すると、一宮小野神社、二宮小河神社、三宮氷川神社、四宮秩父神社、五宮金佐名神社、六宮杉山神社である。このように武蔵の一宮は小野神社の筈だが、現在一般には大宮の氷川神社が武蔵一宮として知られている。つまり武蔵には一宮が2社存在することになる。調べてみると明治政府が、氷川神社を武蔵の鎮守勅祭の社に定めたことはあったらしいが、それは一宮とは別の事で、政教分離した現在、どんな意味があるのだろうか。

結局、相模では一宮争いを三宮が仲裁し、結論を先送りしたのに対して、武蔵では三宮が一宮を名乗って、2社の一宮併立となったようである。それには古来の南北武蔵の勢力対立が反映しているものと思われる。

武蔵一宮小野神社の所在地は多摩市一宮で近くを通る川崎街道の道路標識にも書かれている。かつては相当の規模であったらしいが、多摩川の氾濫などで昔日の面影は少ないようである。

ついでながら、相模の小野神社は、三宮に近い大山の東麓（厚木市）にあり、近くには小町の井戸や小町神社もある。小野小町伝説の土地は全国各地にあるが、多摩の小野路（町田市）にもある。

相模の伝説の地としては、古事記の日本武尊と弟橘姫の「相模の小野に燃える火の火中に立ちて問いし君かも」を挙げておこう。武蔵では橘樹郡（川崎市と横浜市の一部）が姫とのゆかりをいわれており東京湾の走水に入水した姫の遺品を埋めたという古墳や橘樹神社もある。

武蔵総社の7月の祭をスモモ祭と呼び、厄除けに一羽のカラスの絵と神社印を押した烏団扇が授けられる。烏は太陽の使いともいい、魔力があるらしい。またスモモは生命力のシンボルで、根元から切った幹にまた枝葉が茂り、毎年結実している拙宅での例もある。

8．相武の霊場めぐりから

私は戦時中、北海道で育ったので、神社には参拝を強制され、お寺には死んだ人か老人が行くところだと思っていた。そんなこともあって、自分から初詣でなどに行った記憶はない。鵠沼に来てからは藤沢市観光協会の宣伝もあって、地域探訪をかねてほぼ毎年七福神めぐりをして所定の台紙にスタンプを押し景品を貰ってきたが、近年は有料（100円！）になった。七福神というのに毘沙門天が2ヶ所（白旗神社と竜口寺）あり8ヶ所めぐることになる。

となりの鎌倉七福神では弁財天が2ヶ所（鶴岡八幡宮の旗上弁財天と江ノ島神社）あるので、やはり8ヶ所になっている。

七福神めぐりは気軽に出来るので、全国各地に数多くあるが、それぞれの地域の実情に合わせて工夫を凝らしているようである。なかには武蔵七福神のように甘酒のサービスや巡回バスを運行している所もある。藤沢にはそこまで要求しないとしても、入口が分かりにくかったり、車の通行が多かったり、歩道がせまかったり、階段が急な所もある。これらをもう少し整備されたらと思う。

鎌倉は古都だけあって地蔵巡りとか、いくつかの霊場巡りが重なり合っている場合もあるが、有名な坂東三十三観音霊場の第1番杉本寺と第4番長谷寺は鎌倉にある。ほかに著名は寺を挙げれば第13番浅草寺、第14番弘明寺、第18番中禅寺、第25番筑波山大御堂など、第33番の結願は館山の那古寺である。

三十三観音も方々にあるが、坂東三十三観音、西国三十三観音、秩父三十四観音あわせて百観音の霊場巡りを成就するのが良いとされる。坂東、西国の経路の総距離はそれぞれ1000kmを越えるし、秩父は100kmほどだが山坂がきつく階段も多いから達成するのは至難である。

昭和になって発足した霊場巡りに昭和 62（1987）年開創の関東三十六不動霊場がある。この第 1 番は鵠沼からもよく見える大山の雨降山大山寺不動尊で第 36 番結願は成田山明王院神護新勝寺の不動尊である。第 2 番大雄山最乗寺清滝不動尊（道了尊）、第 7 番金剛山金乗院平間寺川崎大師、第 8 番高尾山薬王院有喜寺奥の院不動堂、第 9 番高幡山明王院金剛寺高幡不動尊などが有名どころ、第 1 番、9 番、36 番は、関東三大不動尊として知られる。湘南方面にお住いの方には、大山、成田は御承知でも高幡不動尊には少し説明が必要かもしれない。

高幡不動尊は、京王線高幡不動駅を降りればすぐである。本尊は平安時代作とされる 3m 近い木造の不動明王像（重要文化財）である。ほかにも重要な文化財が多数ある多摩の名刹として知られているが、近年は各地の三十三ヶ所めぐりや本四国と多摩の八十八ヶ所巡拝団を組織するなど、多くの行事を展開している。多摩八十八ヶ所巡拝団と「鵠沼 100 号」に特集された相模国準四国八十八ヶ所とを比較対照してみる。

9．多摩八十八ヶ所巡拝団

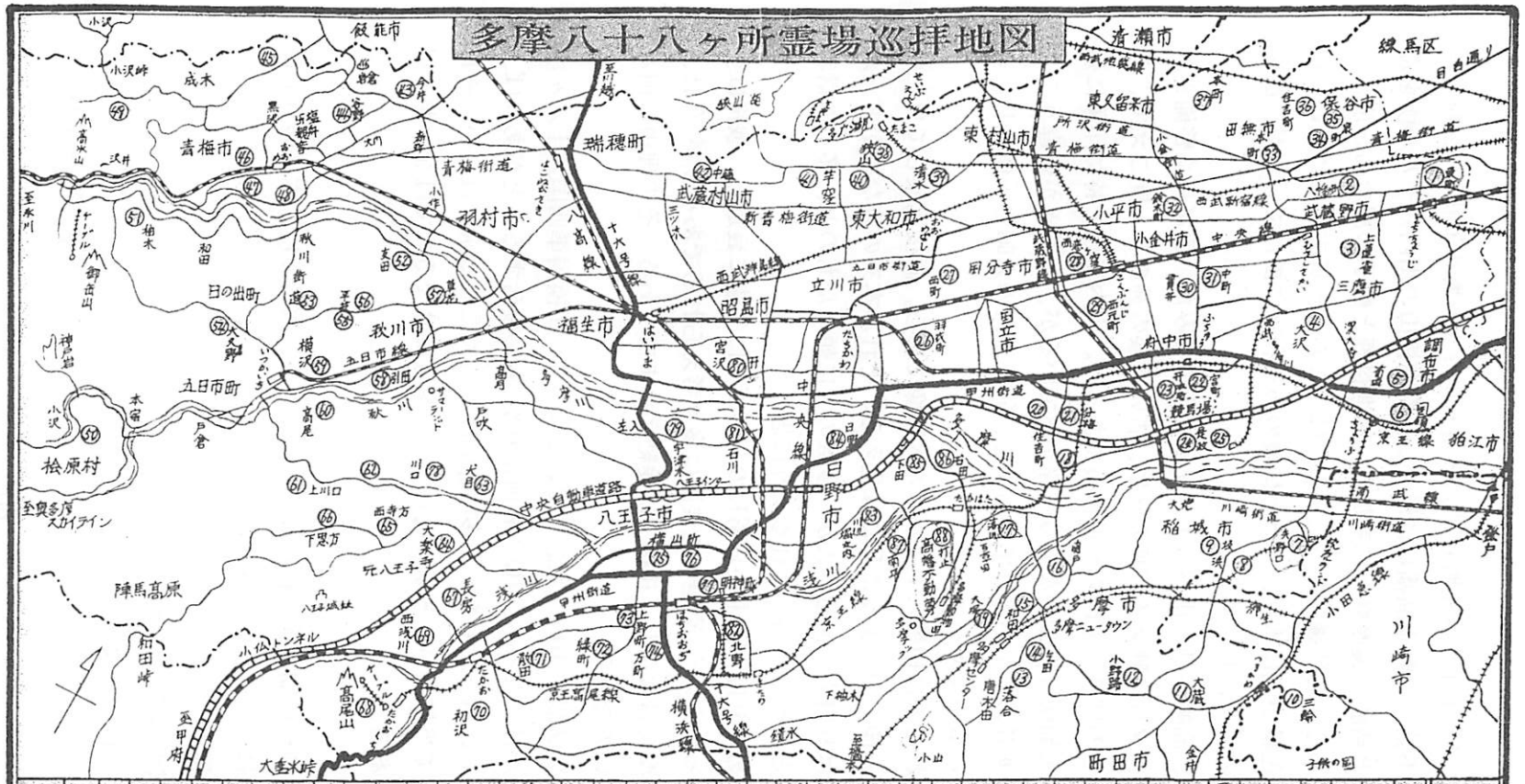
現存する「多摩八十八ヶ所巡拝」一覧の古いものに文政元（1818）年版があり「相模国準四国八十八ヶ所」が文政 2,3 年に作られたのと、ほぼ同時期なのは興味深い。弘法大師入定 1100 年にあたる昭和 9（1934）年に再編成されたものを見ると傘下寺院のめぐり順もかなり入れ替わっているし、詳細な来歴や道案内を織り込んだ道びらきの歌も作られており、当時の盛んな巡拝がしのばれる。

戦後、昭和 30 年頃から、また参拝者が増加し、昭和 46（1971)年からは毎年バスによる巡拝団を組織して現在に至っている。実は私の母が 70 歳の時、第 1 回バスツアーに参加し「多摩八十八ヶ所霊場奉納印譜」が手元に残されている。

平成 4 年刊「巡拝のしおり」（新書版 228 ページ）により、巡拝団の仕組みや寺院の紹介、コースなどをたどってみる。

巡拝団は全コースを 7 回に分け、日帰りのバスツアーを 4 月（1 回）から 10 月（7 回）までの間、各 1 週間（日曜コース、月曜コース…土曜コース）実施する。参加者は好きな曜日を選ぶことが出来る。出発は毎回高幡不動だが、各回の最初の札所からも参加できる。毎月のコースは省略するが、最終回の 10 月のコースは、第 1 番安養寺（武蔵野市吉祥寺東町)。第 7 番威光寺（稲城市矢野口)。第 29 番武蔵国分寺（国分寺市西元町)。第 65 番宝生寺（八王子市元八王子)。第

多摩八十八ヶ所霊場巡拝地図



| | | |

68番高尾山薬王院（八王子市高尾町）。第86番石田寺（日野市石田）。を経て結願の第88番高幡不動（日野市高幡）に帰着し、境内横山の山内八十八ヶ所を巡拝してから、法話と結願の護摩修行に参加し、精進料理と修了の記念品を頂いて終るというものである。念仏嫌いだった私の母は、このとき貫主さんに書いて頂いた「七坊一」の色紙が気に入り、ずっと仏壇のある和室に掛けていたが、没後年を経た今も、そのままにしてある。

私も数年前の秋、高幡不動の山内八十八ヶ所を歩いてみた。道が良く整備されていて歩きやすく、夕日に映える紅葉の林に、古い鐘楼の鐘の音も聞こえて、昔日の多摩の横山をしのばせる素晴らしい散策であった。山内歩きで特に印象に残ったのは88体の大師像は穏やかな笑みを浮かべているが、顔付きが皆違うことである。像には寄進者の名が刻まれているので、同行二人の大師と一体化した寄進者の姿を写しているのであろうか。

そこで思い出されるのは相模八十八ヶ所の大師像である。直接比較して見たわけではないが、どの像も同じように私には見える。それが本来の姿なのかどうかは知らないが、やはり財力のある一人か、少数の人に頼ったものと、多くの信者に支えられたものとの違いが感じられるように思う。

相模八十八ヶ所めぐりは大正末から昭和の初めごろに急速に衰退し、戦後は全く忘れられてしまったという。衰退した要因は多々考えられるであろうが、今日、霊場めぐりは、多摩では復活し、相模では途絶えたままである。その理由は何なのかを考えてみたいのである。

鵠沼を語る会が会誌鵠沼100号記念号でおこなった、相模国準四国八十八ヶ所の現状調査がきっかけとなって、相模の札所巡りが、もし復活することがあれば、それはそれで喜ばしい事とおもうが、多摩と同様のものになる訳ではない。それぞれの違いがあって当然だが、多摩の例も一つの参考にはなるのではないかと思い紹介した次第である。

今回は大部分を神社仏閣関係で終わってしまったが、次号では、本来の目的に沿った以下の事項について書いてみたいと思っている。

１０．海と川の風土

１１．「あずまや」のことなど

１２．海のかなた山のあなた

（うえまつ　たみや）

今井達夫遺稿

南天の赤い実

今井 達夫

朝、とはおこがましい、はっきりいえば午近いころ洗面所に立つと私は一応ガラス窓越しに南天の状態を仔細らしい視線で眺める。いや、これもすこしちがう。毎日同じ心持でというわけではない。何かに心をうばわれて全く無関心の日もある、0・ヘンリイ的センティメントにばかりかかわり合っていないのはさほど閑人ではない証拠といえるのかも知れないが、一方ではそういう日は心持が充実しているのかと疑ってもいる私でもある。すこし理屈っぽくなった、改行をして出直すことにしよう。

いつごろ植えたのか覚えていないが、現在屋内で立っている私の視線の先きに同じ程度の高さのところにその花があり、実をつけるようになった。そういう習慣をはっきり自覚するようになったのは四五年前からで、熱湯に手首から先きをつけて指の関節の働きをなめらかにする作業をはじめた結果である。ここでまた私は説明不足の心配におそわれた。どういうわけでそんな作業をはじめたのかを説明しなければわかっていただけないと思ったわけである。よろしい。くどいぞというお小言は承知の上である。大変わたくしごとになってしまうが、足かけ六年前に発作を起して意識を失ったまま病院へはこびこまれた私は、その国立病院からさらにそれ専門の温泉病院などで療養したおかげでどうやら退院、家附近はステッキを頼りに散歩できるようになった。しかし、手の方の恢復は思ったようにうまく行かなかった。こうして原稿紙をよごすのも、左手を使わなければならない現在である。

それにしても、動かすのさえ痛みをこらえなければならなかった右手をどうやら上げ下げ自由な所まで持って来ることができるようになったのは、温泉病院の作業療法室で受けた熱湯にひたす療法のおかげで、だから退院後もその療法をつづけているわけだ。そうやって右手を熱湯にひたし、左手で右手の甲をおさえつけ、一二三四とかぞえながら百を越すまで辛抱している。その間口のなかでかぞえる数で調子をとって腰を左右に振る運動を試みる。近ごろでは百八つかぞえることにするようになったが、そんな数はどうでもいい、その間中窓そとの南天を眺めていることからこんな感想が生まれたのである。前おきが長くなった。やっ

と南天へもどることができた。

南天の花は白で実は赤い。実が赤いまるい玉であることは目に刻みつけられているが、花が白い小さな形で群れて咲くとはたった今百科事典から教わったばかりである。私はこういうことに無関心というわるい癖の持主で、今日も洗面所で赤い実を目にして花の色がどんな色だったか思い出せず百科事典を家人に引っぱり出してもらったのだが、ほんとは赤い実がいつごろまで落ちずにいるものかそれを知るのが目的であった。ところが、私の目的は裏切られた。いつものことであるが、百科事典もその他私の持っている辞書たちは私そういう目的を叶えてくれた覚えがないのである。初夏そういう白い小粒な花をつけるとの説明はあったが、赤いまるい実がいつごろまでそこにとまっているのかは全く書いてなかった。字引というものは、——と嘆いたひとがいる、いつでも知りたいことは教えてくれないものだ。全く同感の私は、この場合もむしろそうだろうと赤い実の落ちる時期を教えてくれないことにむしろほっとしたのであるが、それにはこういう幼稚な落ちが胸のなかにあったからである。

ここでもう一度 O・ヘンリイ氏に出てもらう。彼の「最後の一葉」という作品はわが国の読者の嗜好に合うとみえ、その翻訳はもちろん、それを原材とした読物など幾十種類も存在しているようである。私は脳溢血の後遺症療養者として、毎朝目にはいるその赤い実の消え失せる日を自分の運命と結びつける、——冗談じゃない、そんな迷信を持つほど弱気だったら今まで生きながらえる筈はないではないか。そんなふうに苦笑してみせる私だが、幾年ものあいだ疑問のまますてておいたのを百科事典で知ろうとして裏切られたのをどうかんじるべきか、まだ結論は出ていない。まだ結論に達しないのは当然だが、強いて求める要もあるまいとおちついていることを、そして、ことしこそその赤い実の消え去る日を確かめてやろうと思い立ったことを現在の結論にしたいのである。

書き落したが、洗面所前の南天はおびただしい花はつけるが、赤い実はほぼかぞえられるほどの程度である。今日はいくつあっただろうか、現在冬の最中だが、かさなり合っている葉の蔭にかくれて勘定しにくい。また、それを正確にかぞえ上げるほどの熱意ははじめからなかった私であると白状しよう。

「鵠沼を語る会」活動の記録

（平成２２年１０月～平成２３年３月）総務担当

運営委員会　　９月２８日（火）　　１１名出席

平成２２年１０月例会　１０月１２日（火）１０時～１２時　　１９名出席

議題１　会誌『鵠沼』１０１号配付について —出席者に席上配付した。欠席者には従来通り別途配付とした。

議題２　鵠沼橋旧後藤医院 鵠沼分院（現 鵠沼橋市民の家）～国登録有形文化財登録について —建物保存への働きかけが起点となり登録が実現され、それを記念して郷土資料展示室にて資料展示されることが報告された。

議題３　公民館での展示について —昭和の成長期藤沢を中心とした文化人のインフォーマルなつどい『すわん會』をテーマに展示することが紹介された。

議題４　藤沢市かわせみ学園講座について —藤沢市生涯学習大学かわせみ学園からの要請により、当会から岡田会員が『岸田劉生と鵠沼』６回放送、渡部瞭会員が『変わりゆく地域の自然や歴史—明治から昭和へ』１回放送の講義をすることが紹介された。（インターネットで藤沢市のホームページから試聴することができます）

お話—『鵠沼の自然の変遷』について渡部瞭会員からお話していただいた。内容は、会誌１０１号に寄稿した内容を参照願います。

運営委員会　　１０月２６日（火）　　１２名出席

研究報告　藤沢市市制施行７０周年記念　歴史講演会と研究報告

１１月１３日（土）藤沢市文書館主催により労働会館にて行なわれた。第一部は当会の会員でもある圭室文雄明治大学名誉教授による『江戸時代相模国の霊場信仰』の記念講演があり、第二部研究報告として当会による『相模国準四国八十八ヶ所とその現状』を会長他数名で報告した。内容は前年度会員が分担して札所調査し、ガイドブックにまとめたものをビジュアルを加えて説明した。

参加者は１２０名程の盛況であり、展示パネルも好評で、質疑応答も活

発に行なわれた。終了後には準備したガイドブックも完売した。

平成２２年１１月例会　１１月１６日（火）１０時～１２時　１７名出席

議題１　公民館まつりの報告 —１１月６日、７日に行なわれ、当会の『すわん會』の展示会場にも多数の方が来られ、懐かしく当時を思い出され、熱心に展示パネルを閲覧される方も多くいたという報告がされた。

議題２　藤沢市市制施行７０周年記念　歴史講演会と研究報告について —前述の項目の記載内容が報告された。

お話—　『鵠沼橋旧後藤医院鵠沼分院（現鵠沼橋市民の家）～国登録有形文化財(建造物)登録記念展～』閲覧　郷土資料展示室で展示中のパネルを当会の会員の説明を受け閲覧した。

運営委員会　１１月３０日（火）　９名出席

平成２２年１２月例会　１２月１４日（火）１０時～１２時　２１名出席

議題１　新年会について —１月１８日例年通りアコレードにて行なう概要が説明された。

議題２　その他 —藤沢市の公益的市民活動助成事業としての『相模国準四国八十八ヶ所』関係事業について中間報告を行なったこと及びかわせみ学園の放送講座についての中間状況の報告があった。

お話–　『引地川の変遷について』内藤会長からお話をしてもらった。
昔の地租改正図から変化の経緯の説明、明治時代の海水浴風景、関東大震災による砂地の９０センチの隆起、津波の護岸工事等スライドを使って貴重な写真も織り交ぜて説明された。

運営委員会　１２月２１日（火）　９名出席

平成２３年１月例会＆新年会１月１８日（火）１１時３０分～１４時　３４名出席

場所　鵠沼マリンロード（鵠沼海岸商店街）のアコレード

例会　報告事項 —会誌『鵠沼』１０１号の現在　の進捗状況、今井達夫稿および資料を神奈川近代文学館に会として寄贈したこと及び公民館主催の『相模国準四国八十八ヶ所』の講座と見学の紹介がされた。

新年会　内藤会長挨拶、鈴木会員の音頭により乾杯、出席会員による今年の目標、近況等披露。歓談、ビンゴゲームにより和やかなムードの中、懇親

を深め有田副会長の閉会の挨拶でお開きとなった。司会は中島会員。

運営委員会　　１月２５日（火）　　７名出席

公民館主催の講座『相模国準四国八十八ヶ所』と『鵠沼の札所巡り』

１月２７日（木）講義、２月３日（木）札所巡りに当会も会長はじめ数名が２日間協力した。一般参加者１８名。

平成２２年２月例会　　２月　８日（火）１０時～１２時　　２３名出席

議題１　会誌「鵠沼」１０２号について　—進捗状況が報告された。

議題２　新年会の会計報告について　—会計内容の説明がされた。

議題３　その他　—公民館主催の講座について報告された。

お話—『岸田劉生と鵠沼』岡田会員がかわせみ学園で放送した第一週及び第二週分の内容を、補足資料も用いて説明した。

運営委員会　　２月２１日（火）　　１０名出席

平成２３年３月例会　　３月　８日（火）１０時～１２時　　２２名出席

議題１　会誌「鵠沼」１０２号について　—原稿の集結状況について報告された。

議題２　その他　—次年度の活動テーマ募集の展開があった。

お話—『岸田劉生と鵠沼』前回に引き続き、岡田会員がかわせみ学園で放送した第三週及び第四週分の内容を説明した。

（文責　佐藤　弘）

編集後記

＊3月11日（金）14時46分、東北地方太平洋沖でM（マグニチュード）9.0という観測史上最大、関東大震災(M7.9)の30数倍規模の地震発生。青森から茨城までの沿岸浸水面積500㎢におよぶ未曾有の津波被害をもたらし、福島原発は爆発事故を誘発、チェルノブイリ、スリーマイル島に次ぐ放射能の拡散かと世界の注視を浴び、汚染の影響は予断を許しません。被災された方々には心からお見舞いを申し上げます。湘南地区の危機管理体制の見直しは必至です。また計画停電の実施で、不便を強いられている日々です。

＊藤沢市生涯学習課主催「藤沢市生涯学習大学かわせみ学園」の講師依頼に応えて岡田哲明会員による「岸田劉生と鵠沼」の講義が昨年、レディオ湘南から放送されました。聴きっぱなしでは勿体ないという声もあって講義録とテキストを掲載しました。

＊公民館祭りに取り上げた「すわん會」について展示内容を補足する形で「運河」経営者の河井郁子さんに竹内広弥、有田裕一両会員がインタビューして得たエピソードなどを加えて竹内会員に書いて頂きました。

＊植松民也会員から今号にも寄稿を頂きました。前号の続編です。引き続き次号にも書いて頂けそうです。有難うございます。

＊昨年春、刊行した100号記念号「相模国準四国八十八か所特集号」および実費頒布用に作ったモノクロの「相模国準四国八十八か所ガイドブック」は好評で、あっという間に在庫がなくなりました。この事業のその後の展開、活動の状況を＜事業報告＞として竹内会員にまとめていただきました。「相模国準四国八十八ヶ所」の認知度が確実に高まりつつあるのは喜ばしい限りです。

＊今井達夫遺稿の連載も7回目になりました。

＊内藤千代子プロジェクト、今井達夫プロジェクトは平成19年に事業計画として発足しました。4年たった今、内藤千代子については一応の完了の報告を、今井達夫についてはその進捗状況を報告する記事を＜事業報告＞として各々のプロジェクト担当者に執筆して頂きました。

＊前号101号についてお詫びと訂正。「史跡めぐり：かまくらみちを歩く」の写真提供は西村 望会員でした。お名前の記載を洩らしました。また「林達夫のお住い拝見」記事中、真弥子氏は真彌子氏の、杲之助氏は杲之介氏の変換ミスでした。訂正いたします。（岡田）

『鵠沼』　第102号
平成23年３月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行　鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=http://kugenuma.sakura.ne.jp/